



沼津市制 100 周年記念誌

# 読む×見る×わかる 沼津の文学

沼津市教育委員会



沼津市外香貫上山ヨリ見ル芙蓉峯及愛鷹山麓平野一帯及沼津近邱

大正 8 年 香貫山から見た沼津

## 『読む×見る×わかる 沼津の文学』の刊行について

沼津市は北に富士山、南に駿河湾を望む、自然に恵まれた景勝の地です。一年を通じて気候が温暖なため、豊かな天産にも恵まれています。古くから東海道の交通、軍事や商業上重要な地であり、近代以降も様々な文学者を輩出するとともに、数多くの作品に描かれてきました。

令和五年、沼津市は、市制百周年の節目の年を迎えました。本市ではこれを記念し「沼津ゆかりの文学者たち」と題して、企画展や出張展示、文学散歩や講演会など様々なイベントを実施し、沼津と関係の深い文学者にスポットを当て、その作品の魅力を発信して参りました。

そのひとつとして、沼津にゆかりの深い様々な文学者を主に市内の中学生・高校生を対象として、そのひとつとなりや作品に触れる機会とすべく、本冊子を制作することといたしました。この冊子が沼津と文学とに興味を持つ契機となれば幸いです。

なお、本冊子を刊行するにあたり、資料提供並びにご指導いただいた関係各位に、この場をお借りして、厚く御礼を申し上げます。

令和六年三月三十一日

沼津市芹沢光治良記念館

# 目次

■ 『読む×見る×わかる 沼津の文学』の刊行について……………	1
■ 寄稿	
『読む×見る×わかる 沼津の文学』の刊行によせて 沼津市長 頼重秀一……………	3
『読む×見る×わかる 沼津の文学』の刊行によせて 沼津市教育長 奥村 篤……………	4
沼津市制百周年に寄せて 沼津市芹沢光治良記念館助言者 鈴木吉維……………	5
■ 沼津ゆかりの文学マップ(近・現代編)……………	6
■ 沼津市制百周年と文学……………	10
■ ゆかりの文学者たち	
芹沢光治良 11 井上 靖 20 大岡 信 28 若山 牧水 36	
明石 海人 41 大岡 博 46 太宰 治 50 田中 英光 54	
江崎 惇 57 川村 晃 59 佐藤 雅彦 62 鈴木 英治 65	
秋山 香乃 68 曾根 圭介 71 宇佐見りん 73	
■ ゆかりの施設……………	75
■ 沼津ゆかりの文学者(近・現代編)……………	76
■ 主な参考文献……………	83
■ 協力……………	84

『読む×見る×わかる 沼津の文学』の刊行によせて

沼津市長 頼重 秀一

沼津市は、大正十二（一九二三）年七月一日に県内三番目の市として誕生し、その後周辺町村との合併を経て、令和五年に百周年を迎えました。

この機会に、改めて本市の魅力を再発見するとともに、次世代に誇り高い沼津を継承するべく、市民の皆様と共に、その自然、歴史、文化などをテーマとして様々な記念事業を展開してまいりました。

そのなかで、本市の文化のうち文学については「沼津ゆかりの作家顕彰事業」と題し、本市名誉市民でもある芹沢光治良先生、井上靖先生や大岡信先生の三氏を中心に、現代までの本市にゆかりのある様々な文学者を、企画展示、出張展示、講演会や文学散歩などの様々な催事を通じて紹介し、市内外から多くの方のご参加を賜りました。

本市は北に霊峰富士を仰ぎ、南には波静かな奥駿河湾を囲む、豊かな自然と穏やかな気候に恵まれております。その風光明媚な景観は、いにしえより多くの人々を引きつけ、多くの文人墨客が訪れる街でした。

このような沼津の文学風土を知り、その足跡をたどり、次の百年に向けて後世に伝えていくことが今の沼津に生きる私たちの使命なのだと考えております。

本書は、主に沼津市芹沢光治良記念館にて開催した企画展「沼津ゆかりの文学者たち」で取り上げた文学者について、そのひととなりや作品を紹介したものです。

本書を読むことにより、中学生の皆さんが沼津にゆかりのある多くの文学者についての理解を深め、高校生や一般の方々にとってもその業績を再認識していただき、あらためて郷土の魅力を感じていただければ幸いです。

最後になりましたが、本事業開催に際し、各文学者の関係者の皆様から、多大なるご支援とご協力を賜りましたことに、改めて深く感謝を申し上げます。

『読む×見る×わかる 沼津の文学』の刊行によせて

沼津市教育長 奥村 篤

沼津市は、風光明媚で気候温暖な土地柄により、古くから多くの文人墨客がこの地を拠点として活躍されています。

なかでも名誉市民である作家の芹沢光治良先生や井上靖先生、詩人の大岡信先生の三氏をはじめ、歌人の若山牧水先生や明石海人先生などが、この地に魅せられ、数々の作品を描き、功績を残しています。

本市はこのように多くの作家、歌人、詩人や俳人などを養成、輩出してきたまさに「文学のまち」です。

本年（令和五年）七月、本市は市制百周年という記念すべき節目の年を迎えました。これまでの沼津を振り返る中で「先人達への感謝と敬意」、「郷土への誇りと愛着」、「市民との協働」、そして「次の百年への新たな一歩」をコンセプトとして様々な事業を展開してきました。

そのなかで、沼津の文化、とりわけ文学については「沼津ゆかりの作家顕彰事業」として取り上げ、芹沢光治良記念館における「沼津ゆかりの文学者たち」と題した企画展示や、市役所や市内施設での出張展示、講演会や文学散歩といった催事を通じ、一年間にわたり、多くの方にその業績や魅力を紹介してまいりました。

本書は、その記念事業の集大成として刊行するものです。主に市内の中学生を読者の対象とし、近代から現在までの様々な文学者について、本市との関わりを中心に人物像や作品を紹介しています。

本書をきっかけとして、中学生の皆さんがそうした沼津にゆかりの深い様々な文学者の偉業を知り感性を育むことにより、将来の沼津市の文化の発展を担う人物となる事を願っています。また、本書を通して市民の皆様にとりましても、沼津の文学の魅力を再認識できるものとなれば幸いです。

末筆となりますが、本事業の実現に向けて、御尽力いただきました関係者の皆様方から感謝申し上げます。

## 沼津市制百周年に寄せて

沼津市芹沢光治良記念館助言者

鈴木吉維

かつて私は沼津の地をよく歩きました。狩野川、我入道、不動岩、千本浜……。海や川を眺めていると、日々の辛いことが少しずつ消えていきます。自分の心と対話するときには海を見るのがよい、なぜなら海は人間の小ささを教えてくれ、謙虚な気持ちにさせてくれるからです。透明になった心で振り返ると、愛鷹山を前景とした富士山がこちらを向いています。その威容は不思議と暖かく、つねに私の心を励ましてくれます。そうだ、純粹に生きていこう、そんな勇気が湧いてくるのです。

人生はいつも順風満帆というわけにはいきません。特に若いときは不安と迷いの中にいるものです。心が悲鳴を上げているときは、かつて同じ道をたどった人生の先輩の言葉に耳を傾けてみましょう。どのようにして運命を乗り越えたのか、どうやって逆境からの第一歩を踏み出したのか、それを記したものが文学作品なのです。

沼津は芹沢光治良や井上靖、大岡信といった、日本を代表する素晴らしい文学者を生んだ土地です。彼らは沼津で青春時代を過ごしたことを作品に残しています。青年期は人生の基礎を養い、後の生き方に多大な影響を与える大切な時期ですから、苦しいこと、悲しいこと、そして心躍るような胸の高鳴りなど、人生を決定づけた若い頃のことを読者に伝えたかったです。

若山牧水は、長い旅の果てに沼津を定住の地に選びました。太宰治や田中英光は、海を見、山を眺め、人々と対話しながら小説を生み出していきました。有名無名を問わず、様々な文化を育む風土が確かにここにはあるのです。沼津市制百周年をひとつの契機として、多くの先人たちが残してくれた文学作品をぜひお読みください。そこには今につながる文学の魂が息づいています。それはこれから生きる糧となる宝石なのです。





①静岡県立沼津東高校

芹沢光治良・井上靖・大岡信の母校。3人の詩碑 横爪健・落合京太郎・大岡博・江崎伸・川村晃・佐藤雅彦・曾根主介の母校



②勝田香月墓所

沼津市東熊堂・大泉寺内



新東名高速道路

③沼津市立沼津高校

渡辺白泉句碑/白泉が教師を務めた学校/鈴木英治の母校



愛鷹PA

⑤清水杏芽句碑

沼津市大諏訪・天満宮(吉祥院)内



⑥明石海人墓所

沼津市西間門共同墓地内



⑦若山牧水旧居跡

沼津市本西松下



⑪妙覚寺

木下圭太郎が中学時代に宿泊  
井上靖が中学時代に下宿



⑫沼津市民文化センター

旧制沼津中学校(現・沼津東高校)跡地  
施設内に芹沢光治良・井上靖詩碑





凡例

- 市内の史跡等のうち、主な近・現代の文学者に関するものを記載した。
- 句碑については、このほかに光長寺、岡宮浅間神社（岡宮）、大中寺（中沢田）、紹因寺（沢田）、蓮光寺（三芳町）、耕雲寺（大岡）、真楽寺（末広町）、いきいきホーム松下（松下町）、乗運寺（幸町）、天満宮、浄因寺（三津）等にもある。
- 香貫山、千本松原、狩野川、我入道海岸、江浦、三津、戸田等の市内を舞台として描いた作品は多数あり、本地図では紙幅の都合上、記載は省略した。

⑯ 芹沢光治良文学碑

沼津市立第三中学校内



⑰ 勝田香月記念碑

港口公園内



⑲ 芹沢光治良生誕地碑

沼津市我入道東町



⑳ 芹沢光治良詩碑

我入道連合自治会館



㉑ 孤絶の碑

我入道海岸・芹沢光治良句碑



せきこれかつ  
㉓ 積惟勝歌碑

我入道公園内



㉔ 安田屋旅館

太宰治文学碑/太宰が滞在し「斜陽」を執筆



太宰治が滞在した客室



「斜陽」文学碑

ぜんどうのひ  
㉕ 吟道之碑

沼津市西涌江梨



大瀬崎  
ビャクラン  
樹林

⑯

⑲

↓至 沼津市戸田

## 沼津市制百周年と文学

大正十二（一九二三）年七月一日、沼津町と楊原村が合併して沼津市が誕生しました。沼津は古くから東海道の宿場町であり、近代以降も政治、経済、文化の中心地として発展してきました。

北には愛鷹山がそびえ、その背後には高く美しい富士山を望みます。市の中心部を流れる狩野川は駿河湾へと注ぎ、海岸線は千本松原から三津を経て、最南部の戸田に至るまで約六十kmを有しています。

このような自然環境に恵まれた沼津の風土は、文学にも様々な影響を与えています。特に明治時代以降は多くの文学者を輩出し、様々な文学作品の舞台としても描かれてきました。ゆかりのある文学者としては、若山牧水、芹沢光治良、明石海人、大岡博、井上靖、太宰治、田中英光、江崎惇、川村晁、大岡信、佐藤雅彦、鈴木英治、曾根圭介、秋山香乃、宇佐見りんなど、数えきれないほどです。

この冊子は、これまで百年の間に沼津の文化に多大な影響を与えた文学者を取り上げるとともに、未来を彩る現代の文学者にも視野を広げて顕彰し、今後の文化の発展を期待するものです。



沼津市に生まれ育った作家

芹沢 光治良 明治二十九年〜平成五年



昭和48年 芹沢文学館前で

明治二十九年、駿東郡楊原村（現・沼津市）我入道に網元の子として生まれます。本名は光治良。楊原尋常高等小学校（現・沼津市立第三小学校）を卒業後、旧制沼津中学校（現・沼津東高等学校）に進学するまでの間に、沼津尋常高等小学校（現・沼津市立第一小学校）の代用教員を務めました。その後、原町（現・沼津市原）の植松家に家庭教師として住み込みます。

東京帝国大学（現・東京大学）経済学部を卒業後、農商務省の官吏（現在の国家公務員）を経て、フランス・パリ大学へ留学します。当時、死病として恐れられた肺結核に罹るものの、スイスやフランスで療養し、作家になる決意を固めます。

帰国後、昭和五年に「ブルジョア」を『改造』の懸賞創作に応募し、一等に当選して作家となります。以後多くの作品を著しましたが、中でも沼津中学時代から書き始めた自伝的大河小説『人間の運命』（昭和三十七〜四十三年）は高い評価を得ました。

日本芸術院賞、フランス芸術文化勲章コマンドゥールなどを受章、第五代日本ペンクラブ会長など数々の重要な役職を務めました。

昭和三十八年、我入道海岸に文学碑「風に鳴る碑」が建立されます。昭和四十五年、我入道に芹沢文学館（現・沼津市芹沢光治良記念館）が開館。昭和五十五年、名誉市民の称号を贈呈されます。昭和五十七年、我入道海岸に文学碑「孤絶の碑」が建立されました。また、沼津中学校跡地である現・沼津市民文化セン



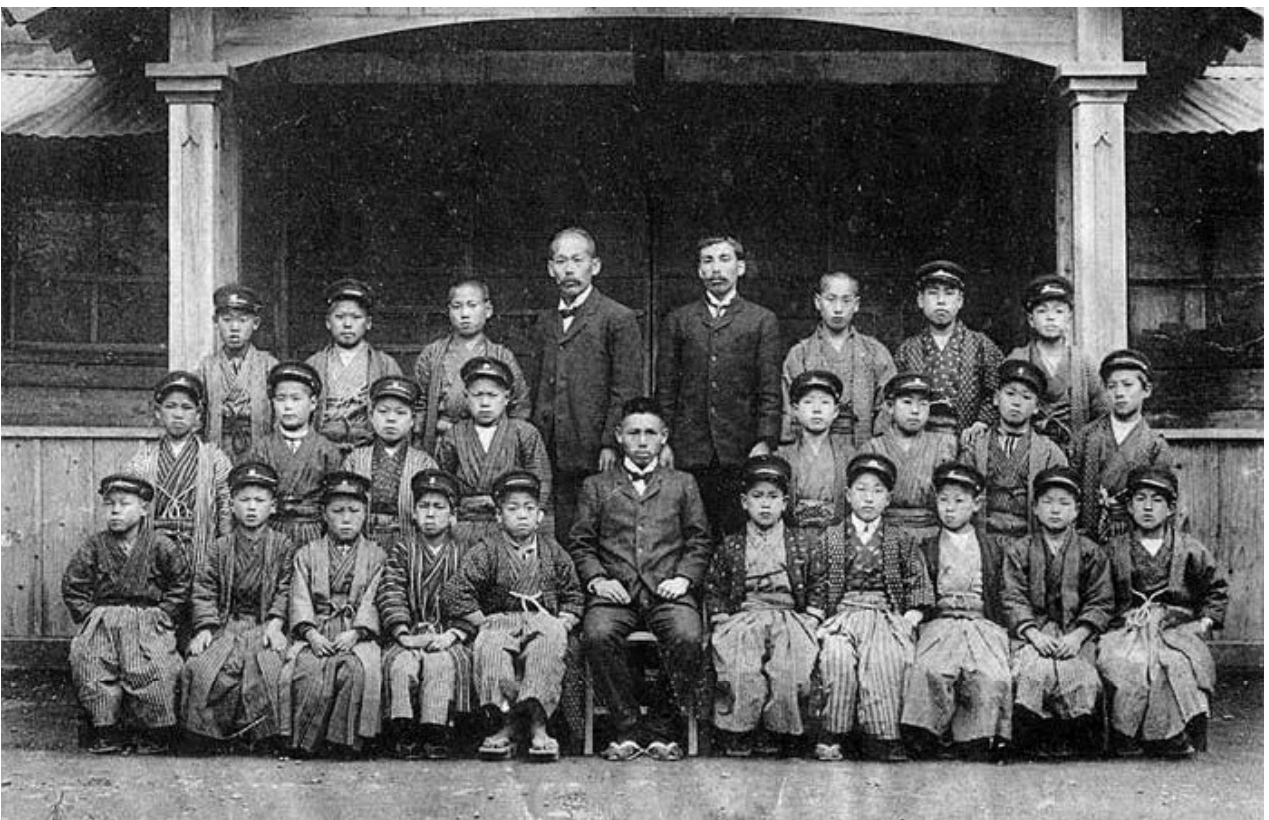
生誕地碑（我入道東町）

ターと、母校である沼津東高等学校に、芹沢光治良・井上靖の詩碑と文学碑が建立されました。

平成五年、老衰ろうすいのため死去、沼津市中瀬町なかせちまうの市営墓地に眠っています。

■ 光治良の生まれ育った我入道（第三地区）

故郷・我入道には、生誕地碑や文学碑など多くのゆかりの場所があります。



楊原小学校（現・沼津市立第三小学校）卒業記念写真 前から2列目左から2人目が光治良



文学碑「風に鳴る碑」と碑文



昭和 38 年 3 月 風に鳴る碑除幕式にて



我入道連合自治会館

われこの地に生れ 跣はだしで育ちて  
 世にはばたけど 時に西風胸を叩きて  
 だせん(難船)だとおびやかしてやまず  
 されど清き狩野の流 心を洗ひ  
 けだかき富岳は常にわれを上げませり  
 翁おきなになりて帰れば  
 村人は豊かに極楽人になりて我を迎う  
 思へばありがたきかな  
 本籍ここにありて  
 極楽人の仲間なるを  
 一九八三年  
 八十六翁 光治良

我入道連合自治会館にある光治良の詩碑碑文



文学碑「孤絶の碑」(我入道海岸)



狩野川河口から我入道方面

## ■作品に描かれる沼津

### 人間の運命（小説）

この作品は、光治良が六十歳を過ぎてから、それまでの半生を基にして明治・大正・昭和時代の日本を描いた大河小説です。次の文章は、沼津中学校に通う主人公・森次郎が、美術と国語の教師・前川から、香貫山に連れられて故郷・沼津の風景の美しさを教わる場面です。

次の図画の時間に、（前川）先生は野外写生だと称して、中学校の裏から、一<sup>キロメートル</sup> 軒ばかり離れた香貫山へつれ出した。落葉を掻く<sup>か</sup>近在の人々が踏みならした<sup>メートル</sup> けわしい小径を、一列になつてやつと二百米も登ると、尾根の一角らしい二三十坪の平地に出た。（略）

「（略）こんな美しい風景の土地は、あんまりないよ。よく一望のうちに故郷をおさめて、景色が美しいということを知るんだな。（略）」

わが住む土地を、次郎は初めてよその土地のように眺める思いで、目を見張った。

眼下にひろがったパノラマの中央に、足下の山麓から駿河湾へ、白く光って大きくS字形を描いているのが、あの狩野川であろうか。こんなにも川幅が広くて、まんまんと水を張っているとは知らなかった。その右岸にかたまつて静かな家々が、沼津の街であろうか。二万足らずの人口が、このなかにかくれているのであろうか。（略）

河口から千本松原をへて三保松原につづく松林が、こんなに一<sup>ひと</sup> 捌けの黒色であろうか。町の北側に、屏風のように愛鷹山が控えているが、その頂が切りとられたようにけずられて、その上に富士山がのり、愛鷹山の斜面は遠く東に箱根山につらなっている。次郎は息をのんで眺めていた。

初刊 昭和三十七〜四十三年 新潮社  
本文の引用は完全版 平成二十五年 勉誠出版





香貫山から見た沼津市街地方面



沼津中学校卒業の頃



大正4年 沼津中学校卒業の頃友人と  
(左)光治良



光治良が住み込みの家庭教師を務めた  
旧植松家・帯笑園(原)



光治良が代用教員を務めた沼津尋常高等小学校  
(現・市立第一小学校)

## ■名誉市民に選ばれる

光治良は、故郷・我入道の人たちの要望で、沼津市の名誉市民（市民や沼津市にゆかりのある人で、学術等の分野で文化の進展に貢献したり、またはその業績が優れていて市民に尊敬される人）に推薦され、昭和五十五年に称号を贈られました。このときに次のエッセイを発表し、故郷沼津への感謝の思いを綴っています。

## 故郷沼津（随筆）

私は旧制の一高<sup>(1)</sup>に入学して故郷を去って以来、故郷はないものとして、棲<sup>す</sup>むところを常に故郷だと考えて生きた。

東京では東京を故郷とし、パリではパリを故郷として暮<sup>くら</sup>した。そんな淋<sup>さび</sup>しい私の心を、後年中学校の先輩のO氏が故郷に向けさせてくれた。そのとき私は六十三歳だったが、故郷の豊かな自然、美しい風物<sup>ふうぶつ</sup>、明るい光が、私の性格をつくっているばかりでなく、私の文学の基本をなしていることに初めて気付いて驚き、故郷を

有<sup>あり</sup>難<sup>がた</sup>いものとして頭<sup>こゝろ</sup>を垂<sup>た</sup>れた。そう言えば、三十歳頃、死病をスイスの高原で闘<sup>たたか</sup>っていたとき、少年の日、大瀬崎<sup>おせざき</sup>から仰<sup>おぼろ</sup>いだ壮<sup>そうごん</sup>厳<sup>げん</sup>な富<sup>ふ</sup>岳<sup>がく</sup>や牛<sup>うし</sup>臥<sup>ぶせ</sup>山頂<sup>さんてい</sup>で向きあつた優しい富士が、しばしば瞼<sup>まぶた</sup>に浮<sup>うか</sup>んでは、生きて還<sup>かへ</sup>るんだと激励したことも忘れられない。

初出 『芹沢光治良先生名誉市民称号贈呈式パンフレット』

昭和五十五年 沼津市役所

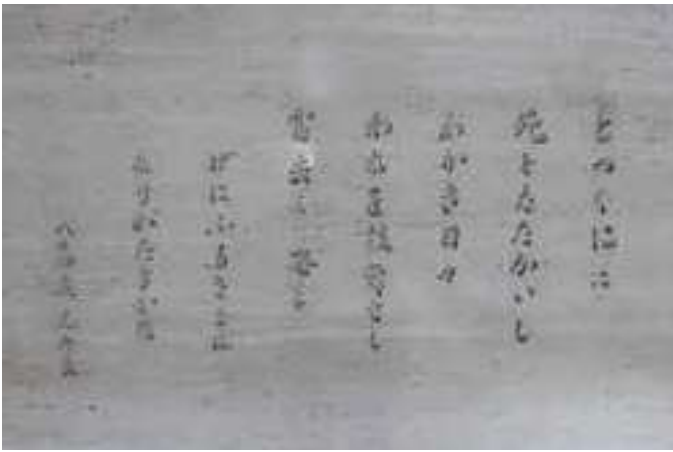
注

(1) 現在の東京大学教養学部相当

(2) 重々しくて立派なこと



名誉市民章受章時 庄司沼津市長と



光治良が通学した頃の沼津中学校跡地  
(現・沼津市民文化センター)

注

とづくに<sup>①</sup>  
 死とたたかいし  
 わかき日々  
 われを鼓舞せし<sup>②</sup>  
 富岳よ 海よ  
 げにふるさは<sup>③</sup>  
 ありがたきかな  
 八十四歳 光治良

(1) 外国  
 (2) はげまし勢いづける  
 (3) まことに

沼津市民文化センター内にある光治良詩碑



沼津東高校内の芹沢光治良・井上靖詩碑



明治四十四年より五年間  
 この中学校に学べり  
 恵まれたる者のみ  
 中学生になる時代とて  
 日毎朝礼に富士を仰ぎ  
 偉大な夢をいだきて  
 勉学に励みたり  
 想えば懐かしきかな  
 昭和六十二年  
 芹沢光治良



光治良墓所(中瀬町・市営墓地)

現在、手に入る作品を紹介します。

■読める芹沢光治良の作品



わが命果てて  
 天に昇るとも  
 魂の故里パリ・東京に  
 舞いもどるたび  
 命の故里沼津に飛びて  
 市民を見守り幸を祈らん  
 九十一翁 光治良

沼津市民文化センター庭にあった  
 光治良詩碑  
 (令和5年現在、香陵公園周辺整備  
 事業実施中のため、沼津東高校へ一  
 時移転)



- 『愛蔵版『人間の運命』全七巻セット(平成三年 新潮社) あいぞうばん
- 『芹沢光治良文学館』全十二巻(平成七、九年 新潮社)
- 愛蔵版『神と人間』全八巻セット(平成十八年 新潮社)
- 完全版『人間の運命』本編十六巻・別巻二巻  
 (平成二十五年 勉誠出版)
- 『芹沢光治良戦中戦後日記』(平成二十七年 勉誠出版)
- 少女小説集『緑の校庭』(平成二十九年 ポプラ社)
- 新装版『巴里に死す』(令和元年 勉誠出版)
- 『サムライの末裔』(令和元年 小学館)
- 『孤絶』(令和三年 小学館)
- 『ブルジョア・結核患者』(令和五年 小学館)

## ■ 沼津市芹沢光治良記念館

昭和四十五年五月三十日、光治良の旧制沼津中学校の後輩である岡野喜一郎（元スルガ銀行会長）が設立した旧財団法人芹沢・井上文学館により、光治良の生誕地である沼津市我入道に建設され、長年運営されてきました。平成二十一年四月一日、同財団法人から沼津市に寄贈され、同年十月一日に「沼津市芹沢光治良記念館」としてリニューアルしました。

設計者の菊竹清訓は、光治良とその文学を具体的に表現するため、様々なモチーフを



沼津市芹沢光治良記念館

所在地：静岡県沼津市我入道蔓陀ヶ原517-1



1階展示室



2階市民ギャラリー

建物に取り入れてあります。そのひとつとして、光治良がフランスへ留学したことやフランス文学の影響を受けているため、外観はヨーロッパにある中世の教会をイメージしています。

一階展示室では、我入道で生まれ育ち、沼津市名誉市民でもある光治良の人物像や業績、作品を広く知ってもらうことを目的として、光治良に関連した企画展を開催しています。

また、二階展示室を市民公募によるギャラリーとして開放し、沼津市の文化に関する展示やミニコンサート等を行うことで様々な文化を市民に提供することも目的としています。

多感な青春時代を沼津で過ごした作家

井上靖 明治四十〜平成三年



昭和46年正月 撮影：二村次郎  
(長泉町井上靖文学館所蔵)

る妙覚寺などに下宿し、友人らの影響を受けて文学を始めます。

旧制第四高等学校(現・金沢大学)、九州帝国大学(現・九州大学)を経て、京都帝国大学(現・京都大学)文学部哲学科を卒業後、大阪毎日新聞社(現・毎日新聞社)に入社します。

明治四十年、

北海道旭川に生まれ、幼少時を両親の故郷・天城湯ケ島(現・伊豆市)で過ごします。大正十一年、旧制沼津中学校(現・沼津東高等学校)二年生に転入、沼津市下河原にあ

昭和二十四年「闘牛」を執筆、翌年、同作により芥川賞を受賞します。後、日本芸術院賞、文化勲章など数多くの賞を受賞、第九代日本ペンクラブ会長など数々の重要な役職を務めました。

昭和三十八年、中学時代に友人と多くを過ごした千本浜公園内に文学碑が建立されます。翌年から、中学時代を描いた自伝的小説「夏草冬濤」を『産経新聞』に連載(昭和四十一年刊)。昭和四十八年、長泉町に井上文学館(現・長泉町井上靖文学館)が開館。昭和五十八年に沼津市名誉市民の称号を贈られます。

また、沼津中学校跡地である現・沼津市民文化センターと、母校である沼津東高等学校に、芹沢光治良・井上靖二名の詩碑と文学碑が建立され、以後も市内に多数の文学碑が建立されました。



千本浜公園の文学碑

■ 中学（現在の高校）時代を過ごした沼津  
 靖が沼津中学校に通学していた頃の沼津は、  
 まだ沼津町と言い、大正十五年に卒業するまで  
 の間に隣の楊原村と合併して沼津市になりました。  
 次の文章は、沼津市になって六十周年を迎え  
 た、昭和五十八年に記したエッセイです。この年  
 七月には、名誉市民の称号が贈られました。

### 千本浜に夢見た少年の日々（随筆）

（略）沼津市が  
 市制を布いた大正  
 十二年（一九二三  
 年）という年は、私  
 の沼津中学三年  
 生の時に当る。そ  
 の頃のことを振り  
 返ってみると、気の  
 遠くなるようなは  
 るかな思いであ  
 る。



当時の千本浜海岸  
 （沼津市明治史料館所蔵）

今日、私は作家として立っているが、そのも  
 になつてゐる総てのものを、少年時代を過した  
 沼津という町に負うてゐると思う。私が作家と  
 なるためには香貫山も必要であつたし、狩野川  
 も、千本浜も必要であつたのである。もちろん、  
 そうしたところを一緒に歩き廻つた友人たち  
 なしには、私の今日はあり得なかつたと思う。  
 少年時代を沼津で過したことは、私の持った大  
 きい幸運であつた。

初出 沼津市制六十周年記念誌『グラフ沼津明日へはばたく』

昭和五十八年 沼津市役所



沼津中学校時代  
 （長泉町井上靖文学館所蔵）

## ■作品に描かれる沼津

### 夏草冬濤なつぐさふゆなみ（小説）

この作品は、靖の自伝に基づいた小説『しろばんば』の続編で、主人公・伊上洪作いがかこうさくの過ごした沼津中学時代を描いています。ここでは、上級生の仲間たちと御成橋から狩野川を眺める場面を紹介します。

土曜日に、洪作は増田と小林と三人で千本浜に海を見に行くことにした。（略）

増田が、

「千本浜へ行こうや」

と言いつつ、

洪作は文句なしに、すぐそれに賛成いぜんせいした。小林も異存いぜんはなかった。

三人は校門を出ると、いつもとは反



対に沼津の街の方へと歩き出した。それだけでも、三人の心は弾はずんだ。

御成橋を渡った。三人は御成橋の上で狩野川の流れを見降ろした。

「日本で何番目の川か知ってるか」  
小林がそんな質問を出した。（略）

洪作は汽車の窓からではあるが、天竜川も、大井川も、富士川も見えていた。いずれも大河として知られた川である。そうした大きい川のある静岡県でも

狩野川はそれに続く川であるし、大きさを別にすれば、静岡県では勿もち論ろんのこと、日本でも有数の美しい川であるに違いないと、洪作は思っていた。思っ



沼津中学校時代 友人と（左）井上靖  
（長泉町井上靖文学館所蔵）



いたというより信じていたと言った方が当たっていた。

洪作は、そのことをいつもこの御成橋を渡る時思った。御成橋の上から見る眺めも、いかにも都会の川といった感じで、橋付近の両岸は人家や倉庫で埋められている。その人家や倉庫の列が切れると、上流の方は青草に覆われた堤になり、川筋はゆるやかに大きく身をくねらせて視野から消えている。そして下流の方は少しずつ川幅を広くし、

河口らしい貫録かんろくを示して来る。

しかし、洪作が狩野川を日本で有数の美しい川であると信じているのは、この沼津の町中を流れている狩野川のゆったりとした姿態しだたいの美しさのためではなかった。御成



御成橋と狩野川

橋の上立あたまって、上流の方に眼を遣やる時、洪作にはいつも天城山あまぎさんに源を発している狩野川という川の、その長い一本の川筋が眼に浮かんで来るからであった。

初出 『産経新聞』昭和三十九〜四十年  
初刊 昭和四十一年 新潮社

注

(1) 違った意見や反対の意見



昭和 58 年 7 月 沼津市名誉市民に選ばれる  
(長泉町井上靖文学館所蔵)

■市内の井上靖文学碑

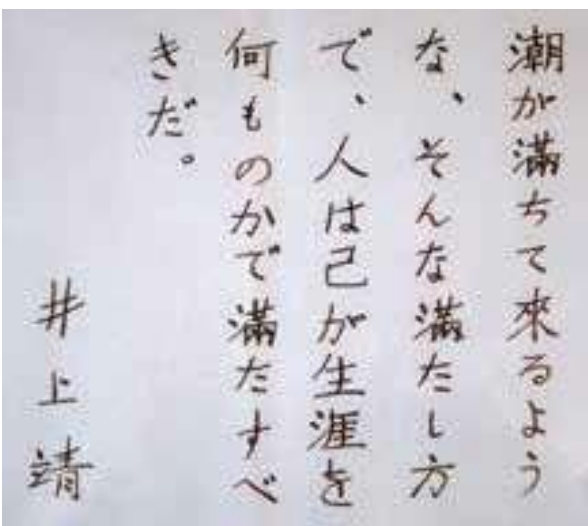
靖の文学碑は市内六か所に七基あります。その一部を紹介します。(全部の碑写真は六く七ページのマップに掲載)



昭和38年3月 千本浜公園の文学碑 除幕式  
右から1人目 井上靖(長泉町井上靖文学館所蔵)



千個の海のかげらが  
千本の松の間に  
挟まっていた  
少年の日  
私は 毎日  
それを一つずつ  
食べて育った  
井上靖



母校の沼津東高校にある芹沢光治良・井上靖詩碑(岡宮)



中学時代に下宿した妙覚寺と  
境内にある文学碑 碑文(下河原)



思うどち  
遊び惚けぬ  
そのかみの  
香貫  
我入道  
みなどまち  
夏は 夏草  
冬は 冬濤  
井上靖



ふるさと  
井上靖

ふるさとと、という言葉は好きだ。故里、故郷、そして故園、郷関、—故園は軽やかで、颯々と風が渡り、郷関は重く、憂愁の薄暮が垂れこめてい  
るが、どちらもいい。しかし、私の最も好きなのは、論語にある「父母国」という呼び方で、わが日本に於ても、これに勝るものはなさそうだ。ふるさとはまことに、「ちちははの国」なのである。

ああ、ふるさとの山河よ、ちちははの国の雲よ、風よ、陽よ。

注

(1) うれい悲しむこと  
(2) 夕暮れ、たそがれ

沼津中学校跡地の沼津市民文化センターにある詩碑(御幸町)

■読める井上靖の作品

多数刊行されており、ここではその一部を紹介します。

文庫版

『猟銃・闘牛』（昭和二十五年 新潮社）

『あすなる物語』（昭和三十三年 新潮社）

『しろばんば』（昭和四十年 新潮社）

『夏草冬濤』上・下巻（昭和四十五年 新潮社）

『幼き日のこと・青春放浪』（昭和五十一年 新潮社）

『北の海』上・下巻（昭和五十五年 新潮社）

『わが母の記』（平成二十四年 講談社）

など多数



## ■長泉町井上靖文学館

昭和四十八年十一月二十五日、靖の旧制沼津中学校の後輩である岡野喜一郎（元スルガ銀行会長）が設立した旧財団法人芹沢・井上文学館により井上文学館として建設され、長年運営されてきました。場所は、沼津市の北方、長泉町の愛鷹山麓にある東野（駿河平）です。令和三年四月、一般財団法人井上靖文学館から長泉

町に移管され、同年七月十七日に「長泉町井上靖文学館」としてリニューアルしました。靖の代表作『あすなる物語』の中で、主人公が



長泉町井上靖文学館

所在地：駿東郡長泉町東野515-149

詠むへ寒月ガカカレバ／キミヲシヌブカナ／アシタカヤマノ／フモトニ住マウ」という歌にちなみ、この地に文学館が建てられました。外観は、『しろばんば』に登場する土蔵をモチーフとしています。

靖に関する初版本や限定本などの希少な書籍、原稿や万年筆といった愛用品を含め、約三千点の資料を所蔵し、一階展示室では、靖の生涯、業績や代表作の紹介展示と企画展を開催しています。

二階は、幅広い年代の方が本に親しんでもらえるように、自由に本が読めるスペース「ミュージアムライブラリー」として利用できます。



1階展示室



2階ミュージアムライブラリー

沼津でロマンを育んだ詩人

大岡 信 昭和六く平成二十九年



昭和 45 年  
(大岡かね子氏所蔵)

昭和六年、  
田方郡三島町  
(現・三島市)  
に生まれます。  
昭和二十二年、  
旧制沼津中学  
校(現・沼津東  
高等学校)四  
年生を修了。在学中に教師や仲間と同人誌  
『鬼の詞』を創刊し、短歌や詩を発表します。  
旧制第一高等学校を経て東京大学文学部国  
文科卒業後、読売新聞社に入社しました。

勤務の傍ら詩作を続け、昭和三十一年に第  
一詩集『記憶と現在』を刊行。以後、文化勲章  
など数多くの賞を受賞し、第十一代日本ペンク  
ラブ会長など数々の重要な役職を務めました。

青年時代、後に妻となる相澤かね子と会う  
ため、しばしば沼津を訪ねました。かね子は、沼

津市に生まれ育ち、沼津学園高等女学校(現・  
飛龍高等学校)を卒業しましたが、大岡とは、  
大岡の旧制沼津中学校時代の友人を通じて  
知り合い、後に沼津で偶然出会ったことで交際  
が始まりました。

かね子への思いを綴った詩「春のために」  
(『記憶と現在』昭和三十一年)、結婚後の「サ  
キの沼津」(『水府 みえないまち』昭和五十六  
年)などを作ります。

このほかに沼津との関係として、第二期(平  
成四く五年度)燦々ぬまづ大使や、山口源大賞  
選考委員(平成七く十三年)および委員長  
(平成九、十三年)を務めました。

また、芹沢光治良の生誕百年記念講演会  
(平成八年)をはじめ、多くの講演会の講師と  
して沼津を訪れ、平成九年には沼津市特別表  
彰を受け、平成十六年に沼津市と三島市から  
それぞれ名誉市民の称号を贈られました。

■大岡信の作品から

次の詩は、大岡が沼津中学時代に同人誌『鬼の詞』に発表した作品で、自身が初めて作った詩と位置付けているものです。

朝の頌歌（詩）

朝は 白い服を着た少女である

朝は

谷間から

泉から

大空の雲から

野末のささやかな流れから

朽ちた木橋のたもとから

その純白の姿を

風に匂はせながら静かに現れる

霧が無数の水滴となつて

静かに静かに降りそそぐ

黒い柔らかな土に

冬を蹴とばして萌え出た薄緑の若菜に

朝のしじまに籠る家々の屋根に

しづしづと降つては

新鮮な色に映える

その時 霧の中には

清らかな髪の少女が微笑み

やがて地上は朝の歡びに溢れる

歡びは

朝の卷毛にしたたる

すつきりとすきとほつた

清い髪の中に宿るニンフである

日が霧の彼方に

羞ぢらひつつ 紅らみながら昇つて来ると

地上にはほのかな弦の音が響いて

やがて 人々は

霧のひそかな手に目覚めつつ

今日も生命の歡喜に満ちて

無限の歴史の連鎖の一環を作り出す

（一九四七・一・六）

初出 『鬼の詞 第六号』昭和二十二年

初刊 「水底吹笛（初期詩篇 昭和二十一〜二十七年）」

『大岡信著作集 第三卷』昭和五十二年 青土社



同人誌『鬼の詞』(大岡かね子氏所蔵)



同人誌『鬼の詞』を発刊した仲間と 前列左より 一人目、大岡信(大岡かね子氏所蔵)



## わが沼津（随筆）

伊豆の三島に生まれて中学は沼津に通ったから、友人は三島や沼津、また熱海にも御殿場にもその他の土地にもいるという幸せを持った。今の学区制というものがまだ施行されていなかった戦中の中学新入生だったので、御殿場線や伊東線、また沼津の南方にひろがる内海の町村や、中伊豆方面からも、少年たちが県立沼津中学（現沼津東高校）に集ってきたのである。同じ中学の大先輩でいえば、芹沢光治良氏は沼津市のやや郊外にある港湾の我入道の出身だし、井上靖氏は中伊豆育ちで、そういうさまざまな土地から集ってきた少年たちが形づく一つの社会は、これでなかなか複雑なものだったと、今にして思う。（略）

一言でいってこの沼津という町はハイカラだった。三島が古くからの宿場町として、お女郎じょろうさんのイメージとともに知られてきたのに対し、沼津はさわやかな海風のあがってくる開かれた交易の町であり、活気にあふれた文化の町であると感ぜられた。光の降る量が少しばかり多

いような感じだった。とくに沼津駅から千本浜へ行くときに、どの道をとるにせよ通過していかなければならない商業の中心街は、これぞ洗練された都会という印象だったのを、三島っ子として思い起こす。

千本浜の千本松原がそのむこうにあって、海水浴場としてまことにすぐれた場所だったが、何といってもそこに生えている松原がみごとだった。「幾山河こえさりゆかば寂しさのはてなむ国ぞけふも旅ゆく」という若山牧水一代の名歌の自然石の歌碑が、千本公園の松林の中にあって、私は母に連れられて海水浴に行ったとき、この石によじのぼろうとしてがんばった記憶がある。

『うたのある風景』昭和六十一年 日本経済新聞社



昭和 45 年  
(大岡かね子氏所蔵)

次に紹介する詩二編は、いずれも妻・かね子（筆名 深瀬サキ）への思いを詠ったものです。大岡は、のちに妻となる相澤かね子に会うため、かね子の住む沼津へ何度も訪れました。

### 春のために（詩）

砂浜にまどろむ春を掘りおこし

おまえはそれで髪を飾る おまえは笑う

波紋のように空に散る笑いの泡立ち

海は静かに草色の陽を温めている

おまえの手をぼくの手に

おまえのつぶてをぼくの空に ああ

今日の空の底を流れる花びらの影

ぼくらの腕に萌え出る新芽

ぼくらの視野の中心に

しぶきをあげて廻転する金の太陽

ぼくら 湖であり樹木であり

芝生の上の木洩れ日であり

木洩れ日のおどるおまえの髪の段丘である

ぼくら

新らしい風の中でドアが開かれ

緑の影とぼくらとを呼ぶ夥しい手

道は柔らかい地の肌の上になまなましく

泉の中でおまえの腕は輝いている

そしてぼくらの睫毛の下には陽を浴びて

静かに成熟しはじめ

海と果実

初出「海と果実」（後改題）『東大文学集団』昭和二十七年  
初刊『記憶と現在』昭和三十一年 ユリイカ



かね子と偶然再会し、交際するきっかけとなった  
御成橋付近



昭和 27 年 相澤かね子と大岡信  
沼津のかね子宅で撮影  
(大岡かね子氏所蔵)

### サキの沼津(詩)

空を映してゐるとき、海は  
もう真夜中とはちがふ海だ。  
きみをおもふとき、ぼくは  
雪の焰ほのおに身を運ばせる。  
海くぐり抜け、

月のきみを  
空高く浮かべてやる。

きみの胸が掌てに重い。

二人のあひだの百キロの距離は、  
綱渡りすべきわが地平線。  
夜をこめて

ぼくはそれを端はしまでたどる、  
暁方の疲弊ひへいのなかで  
つひにきみの戸を叩くまで。

テーベ↑の住むきみの肺の戸。

葉が落ちる。

鳥が高い。

明るくなつた冬ざれの野に  
ぼくらの足が道をつくる。

仮眠してゐる苦しみありの蟻。

やつらの目覚めを恐れつつ  
それでもぼくらはやつらのために  
道をつくる、ぼくら自身で。

ごらん、

海が空を映すとき

いつびぎづつの魚の眼玉を

一輪づつの陽がふちどる。

沈みながら、魚は平たい下顎で

岩藻をついばみ

眼をあけたまま眠りこむ。

知らずに深く苦しんでゐる魂のやうに。

わかるかい、

ならんで立つぼくらの横に、

べつのぼくらが

ふかぶかと眠つてゐるのが。

おお 苦しみも知らず

眠つてゐるのが。

だからぼくは何度でも

雪の焰ほのおに身を運はこばせる。

『水府 みえないまち』昭和五十六年 思潮社

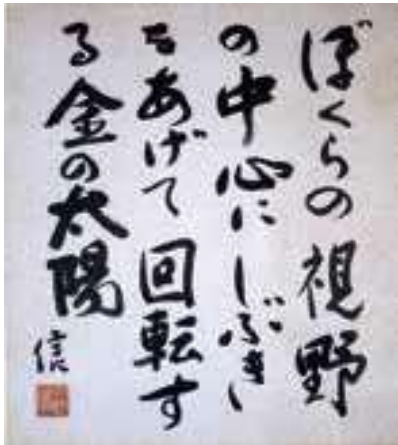
注

(1) 結核けっかくのこと



昭和 31 年 相澤かね子と大岡信

沼津の石川周子宅で撮影 撮影：石川周子（大岡かね子氏所蔵）



碑文を記した色紙  
(沼津東高校所蔵)



母校・沼津東高校にある詩碑



平成 6 年頃  
(大岡かね子氏所蔵)



など多数

■ 読める大岡信の作品

多数刊行されており、ここではその一部を紹介  
します。

新書版

『詩への架橋』(昭和五十二年 岩波書店)

『折々のうた 第一巻』(昭和五十五年 岩波書店)

文庫版

『自選 大岡信詩集』(平成二十八年 岩波書店)

『うたげと孤心』(平成二十九年 岩波書店)

千本松原を愛した歌人

若山 牧水 明治十八〜昭和三年



昭和3年1月  
(沼津牧水会所蔵)

明治十八年、宮崎県東臼杵郡東郷村坪谷(現・日向市)に生まれます。本名は繁。

明治三十

四年、学校の発行した校友会雑誌に短歌や小論文を発表し、また、翌年から各種の雑誌や新聞に散文、短歌、俳句、新体詩を数多く投稿します。

明治四十一年、早稲田大学英文科を卒業し、第一歌集『海の声』を出版します。

大正九年に沼津へ移住し、香貫山の麓に借家住まいをしましたが、大正十四年に沼津市本字南側(現・本西松下)に新築した家に移り



千本松原での牧水  
(沼津牧水会所蔵)

ます。沼津を詠った作品は数多く、沼津移住後に刊行した歌集に『くろ土』(大正十年)、『山桜の歌』(大正十二年)や牧水の死後刊行された『黒松』(昭和十三年)などがあります。特に千本松原を愛し、大正十五年に静岡県により千本松原の伐採が計画された際には、その反対運動の中心となりました。

昭和三年、死去。四十三歳。沼津市幸町にある乗運寺に眠っています。

■作品に描かれる沼津

香貫山（随筆）

登ったのはツイ近頃のことであった。惜しいものに手を触るる様な躊躇を覚えていたのであったが、或る日一番上の子供にせがまれて登って行った。

少し登りかけて先ず私の眼をよろこばしたものは麓に沿うて大きな弧を描きながら海に入っている狩野川の眺めであった。そしてその川に沿うて建ち並んでいる沼津の町の美しさであった。駿河には一体に大きな川が多い。富士、天龍、大井、安倍川などあるが、水量の豊かな事から云ったらこの狩野川に上越すものはない様に私には思われる。（略）

私は子供と共に一つの岩に登って、海を見ることにした。この八歳になる東京育ちの子供は生れて初めて山登りということをするのであった。で、息をはずませながら、あれを見、これを

見、くるくる身体を廻すようにして登っていたのだ。

白く晒された岩の上から見ると、ツイ眼下の麓に我等の住む小さな部落が明らかに見えていた。彼処其処と辿って、自分の家を探して居た子供は、やがて大きな声を出した。

『静かなる旅をゆきつつ』大正十年 アルス

香貫山にある歌碑碑文（短歌）

香貫山いただきに来て吾子とあそび  
ひさしくをれば富士はれにけり



若山牧水歌碑(香貫山香陵台)



大正 15 年 沼津市の地図 (沼津牧水会所蔵)

当時発行された地図に、現在の牧水ゆかりの場所を赤印で掲載

- ・牧水旧居跡「香貫の家」…牧水が沼津に来て最初に住んだ家
- ・牧水旧居跡「市道の家」…香貫山近くの借家から移り、牧水が亡くなるまで住んだ新築の家
- ・沼津市若山牧水記念館…(40 ページで紹介)



## 千本浜公園にある歌碑碑文（短歌）

全国に三百以上あるといわれる牧水の歌碑の第一号で、牧水が亡くなった翌年の昭和四年に建立されました。

幾山河いくやまかわこえさりゆかば寂しさの  
はてなむ国ぞけふも旅ゆく



若山牧水歌碑(千本浜公園)

## ■読める若山牧水の作品 文庫版

- 『若山牧水歌集』（平成十六年 岩波書店）
- 『牧水 酒のうた』（平成十九年 沼津牧水会）
- 『牧水 富士山』（平成二十四年 沼津牧水会）
- 『エッセンシャル牧水 妻が選んだベスト・オブ・牧水』（令和元年 田畑書店）
- 『歩く人 牧水紀行文撰』（令和三年 田畑書店）
- 『樹木とその葉』（令和元年 田畑書店）
- 『牧水 鳥』（令和五年 沼津牧水会）

など多数



乗運寺と境内にある牧水の墓(幸町)



## ■沼津市若山牧水記念館

沼津に若山牧水の記念館を作る運動は、戦後三十有余年にわたり牧水顕彰けんしょうの活動を続けてきた沼津牧水会が中心となって、商工業界や教育文化関係等の各界有志が集まり、昭和五十六年に「沼津牧水記念館建設発起人会」が結成されたことに始まりました。

同会の六年間の募金活動が実り、その寄付を受けた沼津市が、建設費の約半分にその寄付金を充あてて、牧水にゆかりの深い千本松原の一角の海岸に面した景



沼津市若山牧水記念館  
所在地：沼津市千本郷林1907-11

勝地に建設、昭和六十二年十一月一日に開館しました。

歌人・牧水の顕彰と沼津市ゆかりの文学者及びその背景となる沼津の文学風土を広く紹介することによって、市民の文化活動を振興し、創造性を育む文化都市づくりを目指すことを目的としています。

展示室では、牧水の生涯を、主に晩年に移住した沼津時代を中心として、短歌、紀行文集等の代表作品、創刊した詩歌総合雑誌や写真等の貴重な資料を通して紹介しています。

また、時期に応じて、様々な企画展示やイベントを開催しています。



展示室



ラウンジ

沼津に生まれ育った不屈の歌人

明石海人 明治三十四〜昭和十四年



大正14年秋頃 (明石海人顕彰会蔵)

明治三十四年

七月五日、駿東郡

片浜村(現・沼津

市西間門)に生ま

れます。本名は野

田勝太郎。片浜尋

常小学校(現・市

立片浜小学校)、沼津商業学校(現・県立沼津

商業高等学校)を経て静岡師範学校(現・静

岡大学教育学部)を卒業後、現在の沼津市や

富士市、富士宮市の小学校に教員として勤め、

恵まれた結婚をしましたが、二十四歳のときに

ハンセン病を発病しました。この診断は、勝太

郎を悲運のどん底に突き落とししました。妻子

と別れ故郷を離れた海人は、再起をかけて療

養地を転々とし、昭和七年岡山県の国立療養

所長島愛生園に入所します。長島での年月は、  
知覚麻痺、失明、気管切開という三大苦に襲わ  
れた壮絶な闘病生活でした。しかし、療友に支  
えられながら歌人として精進します。  
昭和十四年、亡くなる間際に出版された歌  
集『白描』はベストセラーとなりますが、六月九  
日長島愛生園で死去しました。三十七歳。沼  
津市西間門の共同墓地に眠っています。  
平成十三年には、生誕百周年を記念し、沼  
津商業高等学  
校同窓会・明  
石海人顕彰委  
員会により、学  
校と千本浜公  
園内に歌碑が  
建立されまし  
た。  
また、令和五  
年には郷土の  
偉人の一人と  
して、「ぬまづの  
宝百選」に選ば  
れました。





母校の市立片浜小学校(大諏訪)



大正7年沼津商業学校卒業の頃  
(明石海人顕彰会所蔵)



母校の県立沼津商業高校(駿東郡清水町徳倉)



沼津商業高校敷地内の歌碑



昭和4年 家族と静岡での別離  
(明石海人顕彰会所蔵)



大正14年秋頃 教員時代  
(明石海人顕彰会所蔵)

## ■明石海人の作品から

次の文章は、歌集『白描』（昭和十四年）の序文です。当時ハンセン病は、らい病と呼ばれ、海人が罹ったときは、治療法が確立されていませんでした。厳しい闘病生活をおくりながらも短歌などを創作し、前向きに生きようとする覚悟が記されています。

癩は天刑である。

加わる 答の 一つ一つに、嗚咽し 慟哭し あるいは 呻吟しながら、私は 苦患の 闇をかき 搜って 一縷の 光を 渴き 求めた。

—— 深海に 生きる 魚族の ように、自ら が 燃えなければ 何処にも 光はない —— そう 感じ 得たのは 病が すでに 膏肓に 入って から であつた。

齡三十を 超えて 短歌を 学び、あらためて 己れを見、人を見、山川草木を見るに 及んで、己が 棲む 大地の 如何に 美しく、また 厳しいかを 身をもって 感じ、積年の 苦澁を その 一首一首に 放

## 注

射して 時には 流涕し 時には 抃舞しながら、肉身に 生きる 己れを 祝福した。  
人の世を 脱れて 人の世を 知り、骨肉と 離れて 愛を 信じ、明を 失っては 内に ひらく 青山 白雲をも 見た。

癩は また 天啓でも あつた。

- (1) 天がくだす刑罰
- (2) 木の若枝でつくったむち
- (3) 声を抑えて泣くこと
- (4) 声を上げて泣くこと
- (5) 苦しみや悲しみなどのために、うめくこと
- (6) 苦しみや悩み
- (7) ほんのわずか
- (8) 病気が医者の手の下しようもないほどひどくなった状態のこと
- (9) 激しく泣くこと
- (10) 喜びのあまり手を打って舞うこと
- (11) 親子などの家族
- (12) 天の導きや神の教え

## 短歌

市内にある歌碑に採用されたものを紹介します。特に次の短歌は、遠く離れた場所で闘病しているときに、偶然眼にした故郷・沼津の海の映像を見たときの感動を詠ったものです。

ゆくりなく映画にみればふるさとの  
海に十年のうつろひはなし



千本浜公園内の歌碑と片浜海岸



千本浜公園内の歌碑



シルレア紀の地層は沓とほきそのかみを  
海の蠍さそりの我也す棲みけむ

さくら花かつ散る今日の夕ぐれを  
幾世いくよの底より鐘の鳴りくる

以上の三首は、千本浜公園内の歌碑に刻まれています。次の一首は、母校である県立沼津商業高等学校敷地内の歌碑に刻まれています。

わが指の頂いただきにきて金花虫たまむしの  
けはひはやがて羽根ひらきたり

### ■読める明石海人の作品

『白描』は、平成十三年に明石海人顕彰会から復刻版が刊行されました。死後、『白描』未収録の歌をまとめた『海人遺稿』（昭和十四年改造社）や、『明石海人全集』（昭和十六年改造社）、『明石海人歌集』（平成二十四年 岩波書

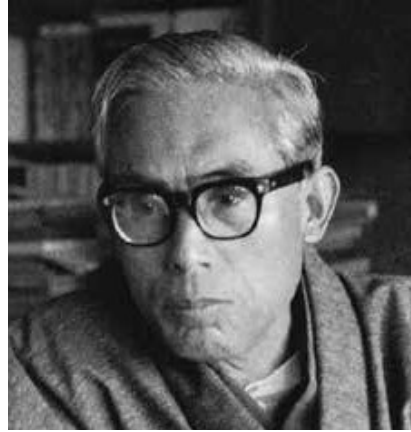
店）などがあります。これらは絶版になっていますが、沼津市立図書館などで読むことができます。



明石海人（野田勝太郎）の墓（西間門共同墓地内）

沼津中学校出身の歌人

大岡博 明治四十〇昭和五十六年



昭和44年書齋にて  
（『菩提樹』大岡博追悼号から）

に定住しました。旧制沼津中学校（現・沼津東高等学校）に進学し、在学中より校友会雑誌に短歌や詩などを寄稿しました。

大正十三年に卒業後、三島第一尋常高等小学校（現・三島市立南小学校）で代用教員をし、昭和三十九年、六十六歳まで教師を続け、その後も六年間沼津精華高等学校（現・沼津中央高等学校）に勤めました。この間に県教職員組合委員長、県児童会館初代館長、中学校校長など数々の重要な役職を務めました。

明治四十年、静岡市に生まれます。貿易商だった父の關係で少年期までを神戸で過ごし、後に三島町（現・三島市）

教職の傍ら作歌を続け、昭和九年、歌誌『菩提樹』を創刊。歌人・窪田空穂に師事し、歌壇で活躍しました。歌集に『溪流』（昭和二十七年）などがあり、中学時代の恩師・前田千寸宅（上香貫二瀬川町）訪問時を詠ったものなど、沼津に関する作歌も収録されています。このほかに『三島町歌』（昭和六年、現・『三島市歌』）、『三島市制施行祝賀行進曲』（昭和十六年）などの作詞も手がけました。

また、沼津中学校の先輩である芹沢光治良を尊敬し、後に交流を深めました。昭和五十六年死去、七十四歳。訃報に際して光治良は弔歌を寄せ、その死を悼みました。没後の昭和六十一年、三島市立公園楽寿園（三島市一番町）に大岡博歌碑建設委員会により歌碑が建立されました。





■ 沼津を詠った作品

初期の歌集『溪流』には、息子・信についてや、沼津を訪れた際に詠った短歌が収められています。

信、<sup>まこと</sup>中学に進む(短歌)

子を先に立てて踏みゆく橋板の  
踏むに揺らぎて川瀬のひかる

橋板を踏み鳴らしてはゆく童<sup>わらべ</sup>  
たのしくあらむ今日の門出を

心きほひ振りむきもせぬわが童  
橋渡りをへ道曲りたり

今日の心尊みもちて汝<sup>なんじ</sup>が一生  
踏みゆきぬべしにこやかにしも



昭和 22 年 大岡博と信(大岡かね子氏所蔵)

己おのれをし恃たのむほかなき世よに生うれ  
今日けふをもち得えし心こゝろ忘わするな

父ちちわれも嘗かつて仰あおぎて怖おそぢたりし  
校門がっこう見み上げ振ふりむけり童わらわ

敷ふきつめし玉たま石いし踏ふみて急いそぐ子こを  
我われかと思おもひ息いきあへぎけり

### 三津水族館（短歌）

全九首のなかから抜粋して紹介します。

青あおく透すく潮うしほの底そこにひそみゐて  
その眼まなこつぶらに見張あかれる赤鯛あかだい

岩いかげの暗くきにさし入いる光ひかりさけ  
うごめくみれば後あとじさる海老えび

長ながき髯ひげゆるらに振ふりて伊勢いせ海老えびの  
すさるとみればあなご現ある

空そらの光ひかり眩まばゆきばかり射あし入いれば  
水みづよりもやや青あおき鰯いわしよ

水族館すいぞくかん廂ひやう眩まばしみ仰あぐ眼まなこに  
めぐらす山やまの緑きぬの深ふかし



伊豆・三津シーパラダイス（旧三津天然水族館）

昭和五十六年、博が七十四歳で亡くなったとき、作家の芹沢光治良は、故郷で生涯歌人として精進した博に対して次の弔歌を捧げました。

ふるさとの尊き花のひとつ散り  
かなしき極み君を葬ふ

昭和六十一年には、故郷の三島市にある市立公園楽寿園（三島市一番町）内に、画家・下田舜堂が委員長となり建設委員会が設置され、歌碑が建立されました。



浪の秀に  
裾洗はせて  
大き月  
ゆらりゆらりと  
遊ぶが  
ごとし  
博

大岡博歌碑と碑文  
(三島市立公園楽寿園)

## ■大岡博の主な作品

これらの作品は、現在絶版になっていますが、一部は沼津市立図書館などで読むことができます。

### 歌集

- 『溪流』（昭和二十七年 長谷川書房）
- 『南麓』（昭和三十八年 春秋社）
- 『童女半跏』（昭和四十八年 牧羊社）
- 『春の鷺』（昭和五十七年 花神社）
- 『大岡博全歌集』（平成二十年 花神社）

### 歌論集

- 『日本抒情詩の発生と其の周辺』（昭和三十五年 日本文芸社）
- 『歌林提唱』（昭和五十三年 短歌新聞社）
- 『作歌みちしるべ』（昭和六十年 短歌新聞社、死去後に信によって刊行）



沼津で作家デビューを果たした

太宰治 明治四十二〜昭和二十三年



昭和19年 三鷹の自宅付近で  
撮影：渡辺好章  
(日本近代文学館所蔵)

明治四十二年、青森県北津軽郡金木村(現・五所川原市)に生まれます。本名は津島修治。

大正十四年、

旧制青森中学校(現・県立青森高等学校)の『校友会誌』に最初の創作「最後の太閤」を発表します。この頃から作家に対して憧れ、芥川龍之介や菊池寛などの著作に親しみます。東京帝国大学入学後、作家の井伏鱒二を訪ね、以後長く教えを受けました。

昭和七年八月、静養を兼ねて静浦村(現・沼津市志下)の坂部啓次郎宅に約一か月滞在し、

文壇的デビュー作と位置付けた自伝的小説「思ひ出」を執筆しました。このことから「作家・太宰治」は沼津で生まれた、といわれています。

また、昭和二十二年二月から三月上旬まで三津の安田屋旅館に滞在し、戦後を生きる没落貴族を描いた長編小説「斜陽」の第一、二章を執筆しました。同年十二月に単行本として刊行されると、たちまちベストセラーとなり、この頃から流行作家として広く注目されました。



志下海岸の夕暮れ



発端丈山から淡島・三津方面

## ■沼津で執筆した作品

### 思ひ出（小説）

この作品は、太宰が青森で過ごした幼い頃を元に描いた自伝的な作品です。物語の冒頭部分を紹介します。

叔母おばについての追憶ついではいろいろとあるが、その頃の父母の思い出は生憎あいにくと一つも持ち合せない。曾祖母そうそ、祖母ぼ、父、母、兄三人、姉四人、弟一人、それに叔母と叔母の娘四人の大家族だった筈はずであるが、叔母を除いて他のひとたちの事は私も五六歳になるまでは殆ど知らずにしたと言つてよい。広い裏庭に、おかし林檎りんごの大木が五六本あったようで、どんよりと曇った日、それらの木に女の子が多人数で登つて行った有様や、そのおなじ庭の一隅いちぐうに菊畑があつて、雨の降つていたとき、私はやはり大勢の女の子らと傘さし合つて菊の花の咲きそろつているのを眺めたことなど、幽かすかに覚えて居るけれど、あの

女の子らが私の姉や従姉いとこたちだったかも知れない。

六つ七つになると思い出もはつきりしている。私がたけという女中から本を読むことを教えられ、二人で様々の本を読み合つた。たけは私の教育に夢中であつた。私は病身だったので、寝ながらたくさん本を読んだ。読む本がなくなれば、たけは村の日曜学校などから子供の本をどしどし借りて来て私に読ませた。私は黙読すること覚えていたので、いくら本を読んでも疲れないのだ。

たけは又、私に道徳を教えた。お寺へ屢々しばしば連れて行つて、地獄じごく極楽らくの御絵掛おえかけ地を見せ説明した。

初出『海豹』  
昭和八年四・六・  
七月号



昭和7年夏 静浦の坂部宅で（右）太宰治  
（日本近代文学館所蔵）

## 斜陽（小説）

太平洋戦争後の没落した貴族の母、姉弟を描いた作品です。太宰は、その第一、二章を三津に滞在して書きました。第一章から一部を紹介します。

私たちが、東京の西片町にしかたまちのお家を捨て、伊豆のこの、ちよつと支那しなふうの山荘に引越して来たのは、日本が無条件降伏をしたとしの、十二月のはじめであった。お父上がお亡くなりになってから、私たちの家の経済はお母さまの弟で、そうしていまではお母さまのたった一人の肉親でいらつしやる和田の叔父おじさまが、全部お世話して下さっていたのだが、戦争が終って世の中が変り、和田の叔父さまが、もう駄目だ、家を売るより他はない、女中にも皆ひまを出して、親子二人で、どこか田舎いなかの小綺麗こぎれいな家を買ひ、気ままに暮したほうがいい、とお母さまにお言ひ渡しになった様子で、お母さまは、お金の事は子供よりも、もっと何もわからないお方だし、和田の叔父さまからそう言われて、それではど

うかよろしく、とお願ひしてしまつたようである。

十一月の末に叔父さまから速達すんが来て、駿豆すず鉄道の沿線に河田子爵ししやくの別荘が売り物に出ている、家は高台で見晴しがよく、畑も百坪つぼばかりある、あのあたりは梅の名所で、冬暖かく夏涼しく、住めばきつと、お氣に召すところと思う、先方と直接お逢あひになつてお話をする必要もあると思われるから、明日、とにかく銀座の私の事務所までおいでを乞こう、という文面で、「お母さま、おいでなさる？」

と私がたずねると、

「だって、お願ひしていたんだもの。」

と、とてもたまらなく淋さびしそうに笑つておつしやつた。

注

(1) 昔の中国の呼び名

初出 『新潮』昭和二十二年七月号  
初刊 昭和二十二年 新潮社



安田屋旅館(内浦三津)



昭和19年 三鷹の自宅付近で  
撮影:渡辺好章  
(日本近代文学館所蔵)



敷地内の文学碑「斜陽」碑



太宰が滞在した客室



このほか、紹介した「思ひ出」は、インターネット上の青空文庫でも読むことができます。  
<https://www.aozora.gr.jp/index.html>

など多数

文庫版

- 『富嶽百景・走れメロス他八篇』(昭和三十二年 岩波書店)
- 『斜陽 他一篇』(昭和六十三年 岩波書店)
- 『人間失格／グッド・バイ 他一篇』(昭和六十三年 岩波書店)
- 『お伽草紙・新釈諸国噺』(平成十六年 岩波書店)
- 『津軽』(平成十六年 新潮社)

数多く出版されているため、ここでは代表作を中心に紹介します。

■読める太宰治の作品

三津ゆかりの作家

田中英光 大正二〇昭和二十四年



昭和 24 年夏  
(日本近代文学館所蔵)

東京府東京市赤坂区榎坂町(現・東京都港区赤坂)に生まれ、鎌倉に育ちます。兄に添削してもらい、小学生の頃より

詩や作文を児童雑誌『赤い鳥』に投稿します。昭和七年、早稲田大学在学中、ロサンゼルス五輪にボート競技選手として出場しました。後に、この体験を基に青春小説「オリンポスの果実」(『文学界』昭和十五年九月号)を執筆しました。

昭和十年、大学卒業後、横浜護謄製造株式会社(現・横浜ゴム)に就職し、京城(現・韓国ソウル)出張所勤務となります。同年創刊の同

人誌『非望』に掲載した「空吹く風」に対し、太宰治から好意的な批評が届き、以後太宰に師事しました。

戦後の昭和二十年九月、前年に疎開していた家族のいる三津に移住し、安田屋旅館に入りして執筆に勤しみました。

翌年、日本共産党に入党し、一時三津から西間門にあった沼津地区委員会事務所に移住します。地区委員長を務め、国鉄(現在のJR)労働争議のため沼津機関区(大手町、現・プラサヴェルデ所在地)で機関区員を支援しましたが、活動の行き詰まりなどから辞任し、三津に戻りました。



安田屋旅館から富士を望む(沼津市明治史料館所蔵)



以降、執筆に専念し、昭和二十二年には三津を訪れた太宰を安田屋旅館で迎えました。

沼津を描いた作品に「N機関区」(昭和二十二年)などがあります。



沼津機関区記念碑 (JR沼津駅南口)



プラサヴェルデ (JR沼津駅北口)

## ■ 作品に描かれる沼津

### N機関区(小説)

このN機関区には二千人あまりの組合員がいた。ここは東海道線で電気区と蒸気区の境目にあたるところであり、日本の電気機関車の大半がこの機関区に入るといわれる、日本でも有数の大機関区だった。そうしてこの機関区に労働組合ができたのは一九四五年十月はじめのことで、鉄道としても日本としてもかなり早い結成式をあげたものだった。この組合ができた当時の話を私はしばしば創立以来つづけて、この組合長をしている山本虎三からきかせてもらった。山本虎三は年のころ四十二、三の男ざかりで、二十何年かのながいあいだ機関士の古参として努めてきて、ふつうならとくに助役になれたひとだったが、もともと上役に楯たてをついても下の者を可愛かわいがる気性のところにもつてきて、十何年前、例の四・一六にちよつと関係があったりしたものだから、戦争中ずつと平機関士をやらされていた。その戦争の末期、これをやはり日本人ぜんたいの戦争と思ひこむ

ようになっていた山本は、若い機関士たち十何名かと輸送挺身決死隊をつくり、B―二九の爆撃や小型機の機銃掃射などをうけながら、石炭の積み込みにけん命だったこともある。そうして終戦直前にN市が爆撃をうけたとき、山本の家は罹災した。おまけに彼はそのすぐあとで赤痢かチブスにかかったので、八月から九月にかけて、ずっと鉄道を休んでしまった。その病床で彼は敗戦のニュースをききはやくも労働組合のことを考えていたそうだ。そうして十月はじめに出勤できるようになると、一種の虚脱状態におちいつている職場で、彼はすぐ労働組合の趣旨をとき同志をつのつてみたが、はじめにはひとりとして彼の言葉に耳をかたむける者がなかった。こうしたことを虎さんとはときどき一種の感慨をこめいくらか自慢話のようにして私に話してきかせた。

初出 『太平』昭和二十二年二月号

初刊 『嘘と少女』昭和二十四年 真善美社

注

(1) 火災などの災害にあうこと。

## ■読める田中英光の作品

文庫版

『田中英光傑作選 オリンポスの果実／さようなら他』

(平成二十七年 KADOKAWA)

『師 太宰治』(平成六年 津軽書房)

など

このほか、紹介した「N機関区」は、『田中英光全集』第五卷(昭和三十九年 芳賀書店)に収録されています。現在絶版になっていますが、沼津市立図書館などで読むことができます。



昭和 24 年夏  
(日本近代文学館所蔵)

沼津中学校を卒業した作家

江崎 惇 大正四く平成七年



(『侍たちの茶摘み唄』から)

大正四年、現在の三島市に生まれます。本名・関野惇。昭和八年、旧制沼津中学校(現・沼津東高等学校)を卒業しました。慶應義塾大学卒業後、放送局勤務

を経て文筆業に入ります。

県内の歴史や人物にかかわる歴史小説を多数著し、昭和五十二年に『蛇捕り宇一譚』で日本作家クラブ賞を受賞。

主な作品に『現代郷土偉人伝放送ドラマ』(昭和三十九年)、『ドキュメント明治の清水次郎長』、『史実山田長政』(昭和六十一年)、『侍たちの茶摘み唄』(平成四年)などがあります。

静岡市に住み、平成三年、

静岡市政功労者(教育文化功労)として表彰されます。日本文芸家クラブ名誉会員、大衆文学研究会、静岡支部会長、静岡市議会議員などを歴任し、SBS静岡放送で番組制作にも携わりました。



創立当時の沼津中学校(『沼中東高百年史』から)

## 鉄舟危難(小説)

江崎の作品から、沼津に触れているものを紹介します。この作品は、実在した幕末の政治家・山岡鉄舟が、将軍・徳川慶喜から命じられて駿府(現・静岡市)に向かった史実を材料として描いた歴史小説です。次の文章は、三島にある竜沢寺から沼津を通り、静岡に向かう道中の一場面です。

竜沢寺から三島明神を過ぎれば東海道の松並木。駿河と伊豆の国境境川に架けられた千貫樋(三島から駿河への灌漑用水)もひとまたぎ、源頼朝が旗揚げののち、奥州から馳せ参じた義経と対面した黄瀬川を渡れば、そこはもう沼津の宿。沼津、原と韋駄天走りの鉄舟は、吉原で富士山を左に見て、蒲原、由比宿を抜ければ、倉沢は薩埵峠の登り口。

『蛇捕り宇一譚』昭和五十二年 新人物往来社

注

- (1) 三島大社(三島市大宮町)のこと
- (2) 現在の東北地方

### ■江崎惇の主な作品

現在、これらの作品は絶版になっていますが、一部の作品は、沼津市立図書館などで読むことができます。

『蛇捕り宇一譚』(昭和五十二年 新人物往来社)

『頼朝をめぐる女たち』(昭和五十五年 スポーツニッポン新聞社出版局)

『実録川上貞奴―世界を翔けた炎の女―』(昭和六十年 新人物往来社)

『史実山田長政』(昭和六十一年 新人物往来社)

『ドキュメント明治の清水次郎長』(昭和六十一年 毎日新聞社)

『侍たちの茶摘み唄』(平成四年 鷹書房弓プレス)

など



沼津で育った芥川賞作家

川村 晃 昭和二〜平成八年



(『美談の出発』から)

昭和二年、台湾に生まれ、昭和五年に一家で沼津市に移住します。沼津市立第一小学校から父・四郎が囑託の音楽教師を務める旧制沼津中学校(現・沼津東高等学校)に進学しますが、昭和十六年、二年生のとき回覧誌に短編小説「海辺の姉妹」を発表すると、風紀紊乱に当たるとして無期停学処分を受けます(同年十二月八日の太平洋戦争開戦により解除)。神経衰弱のため実質上の放校処分となりますが、後に兵庫県尾上の陸軍航空通信学校に入校しました。



昭和二十年八月、敗戦により沼津へ戻り、十月に上京。昭和三十七年三月に「美談の出発」を『文学街』に発表し、同年七月、芥川賞を受賞しました。

文筆業をしながら『毎日新聞』の人生相談を担当し、テレビなどの番組にも多数出演しました。

沼津を舞台とした作品に、沼津兵学校を描いた『維新の兵学校』(昭和四十三年)などがあります。

■川村晃の作品から

あとがき（『維新の兵学校』）

小学校の入学式のときのことです。私は講堂に入ったとたんに、偉くなったような、場ちがいのところへ迷い込んだような、奇妙な気持ちにかられたものでした。周囲の壁にぐるっと、陸軍大将や海軍大将などのいかめしい肖像画が、実に二十ほどもかかげられていたからです。

私の故郷は沼津であり、私の入学した沼津第一小学校が沼津兵学校の付属小学校の後身で、それらの将軍たちはいわば大先輩というわけでした。（略）

沼津を去ってすでに二十余年、いまではすっかりスモッグの東京になじんでいるのですが、その間、それでも私はしばしば沼津を振り返りました。それはべつに、ふけこんで感傷的になったり退嬰的<sup>たいえい</sup>になったりたからなことではなく、自



沼津市立第一小学校（八幡町）

分を知るためには土台となつてゐる幼少時を考へなおし、故郷の自然風土、精神風土なるものを見なおしてみようと思つてのことでした。が、そのつど、いささかへんな話ですが沼津や沼津兵



城岡神社境内にある沼津兵学校跡碑（大手町）

学校に借りがあるような思いをおぼえさせられました。いつか沼津を書こう、沼津兵学校を書いてみよう、借りを返すまでは病氣にもなるな。

「維新の兵学校」は、そういう気持が積もりに積もつたうえで出来上がった作品です。

注

（一）しりごみすること

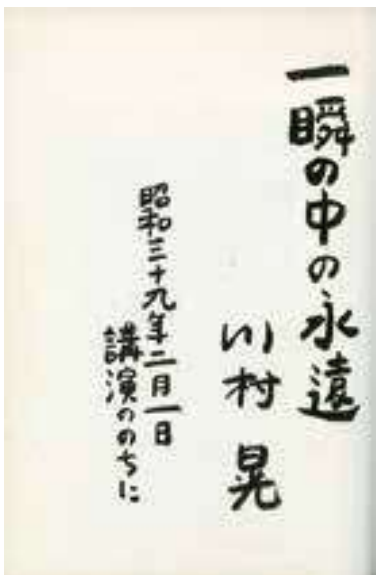
昭和四十三年 人物往来社

■川村晃の主な作品

現在、これらの作品は絶版になっていますが、一部の作品は、沼津市立図書館などで読むことができます。

- 『美談の出発』(昭和三十七年 文芸春秋新社)
- 『ルン・プロ』(昭和三十八年 角川書店)
- 『若い廃墟』(昭和三十九年 学習研究社)
- 『太陽と愛と』(昭和三十九年 冬樹社)
- 『闇にひらく』(昭和四十一年 河出書房)
- 『維新の兵学校』(昭和四十三年 人物往来社)
- 『岩崎弥太郎 物語と史蹟をたずねて』(昭和五十五年 成美堂出版)
- 『宮本武蔵 物語と史蹟をたずねて』(昭和五十九年 成美堂出版)

など



講演会時のサイン  
(沼津東高校所蔵)



昭和39年 沼津東高校での講演  
(沼津東高校文芸部発行『MINERVA』から)

ここからは、現代に活躍する沼津ゆかりの文  
学者を紹介します。

戸田村に生まれ育った作家

佐藤 雅彦 昭和二十九年



撮影：岡田卓士  
(佐藤雅彦氏所蔵)

昭和二十九年、  
田方郡戸田村  
(現・沼津市戸田)  
に生まれます。

昭和四十七年、  
県立沼津東高等  
学校を卒業しま  
す。東京大学教

育学部教育学科を卒業後、電通に入社。

企画制作したCMとしては、湖池屋の『ドン  
タコス』『スコーン』、NECの『バザールでござー  
る』など、テレビ番組としては『ピタゴラスイッ  
チ』などがあります。

慶應義塾大学環境情報学部教授を経て、平  
成十八年より東京芸術大学大学院映像研究

科教授に、令和三年より同大学の名誉教授に  
就任します。

エッセイや小説も数多く執筆し、特に沼津に  
関連した作品に、戸田村で過ごした頃を描い  
た小説『砂浜』(平成十六年)などがあります。  
また、統合された旧戸田中学校の卒業生で  
あることから、令和三年四月、新たに開校した  
沼津市立戸田小中一貫学校の新校歌『戸田の  
風』の作詞を手掛けました。



佐藤雅彦氏所蔵



■ 作品に描かれる沼津

砂浜すなはま（小説）

その村には、御浜みはまと呼ばれる湾に細長くとび出た美しい砂浜さしがあった。砂嘴さしというその地形のおかげで、内海うちうみは波の静かな自然の港になっている。砂浜さしがひろがるのは、内海うちうみに向けた側であり、松林を境として外海そとうみは、大きな丸い岩がどこまでも続いていて、うちつける波が白い細かい泡を、絶えずつくっていた。

夏には浜木綿はまゆうが咲きみだれるその村は、一方を海に面するだけで、ほかの三方は山々に囲まれ閉ざされていた。どこか外の場所に行くのに、村の



佐藤が過ごした戸田の御浜海岸  
昭和 30 年代  
(沼津市戸田造船郷土資料博物館所蔵)

人は日に二本しかない定期船に乗り、海伝いに  
出ていた。

平成十六年 紀伊國屋書店

戸田へだの風かぜ（戸田小中一貫学校 校歌）

作詞 佐藤雅彦 作曲 栗原正己

一

碧あおくしずかに かがやく 内海うちうみ  
いつも 大きく 見守まもってくれる 達磨山だるま  
澄あんだ空気 宝もの われら ここで学まなぶ  
走り出はそう 希望の風かぜに いま 向むかって

二

白く 砕ける波は 石を 丸く研とぎ  
外海そとうみを行いく かつお船ぶね 富士と眺ながめる  
海と山と水と光 われら ここで学まなぶ  
走り出はそう 希望の風かぜに 強く 向むかって

三

橘たちばなの白い花 清らかに 香かほり  
天を高く 見上げれば 鳶とびが弧こを描えがく



沼津市立戸田小中一貫学校(戸田)



戸田港

澄んだ空気 宝ものわれらここで学ぶ  
 走り出そう あしたの風にいま向かって  
 深い海の 潮の恵み 大きく 大きく 息を  
 息を 吸って  
 走り出そう あしたの風にいま向かって  
 走り出そう あしたの風にいま向かって

■読める佐藤雅彦の作品

文庫版

『プチ哲学』(平成十六年 中央公論新社)

『毎月新聞』(平成二十一年 中央公論新社)

単行本

『新しい分かり方』(平成二十九年 中央公論新社)

『考えの整頓 せいとん ベンチの足』(令和三年 暮しの手帖社)

など多数

このほか紹介した『砂浜』(平成十六年 紀伊  
 國屋書店)は、現在絶版ですが、沼津市立図書館  
 などで読むことができます。



沼津に生まれ育った時代小説家

鈴木英治 昭和三十五年



鈴木英治氏所蔵

昭和三十五年、沼津市に生まれま  
す。沼津市立沼津  
高等学校、明治大  
学経営学部を卒業。  
第十七期（平成十  
九～二十年）燦々ぬ  
まづ大使に就任。妻

は歴史小説家の秋山香乃の。

平成十一年に「駿府に吹く風」で角川春樹  
小説賞特別賞を受賞し、翌年三月に『義元謀  
殺』と改題出版してデビューしました。主に、江  
戸時代の事件や人物を素材にして創作する時  
代小説を手掛け、著書は二百冊以上にのぼり  
ます。

代表作に『義

元、遼たり』（令  
和元年）、累計  
三百万部を超え  
る『口入屋用心  
棒』シリーズ（平  
成十七年）、  
『江戸の雷神』シ  
リーズ（平成三  
十年）、『突き  
の鬼一』シリーズ  
（平成三十年  
）、『父子十手捕物日記』シリーズ（平成十  
六年）などがあります。

これらの著作のうち、沼津を思わせる沼里  
藩の留守居役を主人公にした作品に『沼里藩  
留守居役忠勤控』シリーズ（平成二十九年）  
や、沼里藩を舞台にした『新兵衛捕物御用』シ  
リーズ（平成十五～十八年）などがあります。



沼津市立沼津高校（三枚橋鐘突免）

## ■作品に描かれる沼津

### 水斬の剣(小説)

江戸時代、架空の藩である沼里(沼津)で起こった殺人事件を描いた時代小説です。次の文章は、主人公達が鹿拔山(香貫山)から町を眺める場面です。

思いついて鹿拔山をのぼってみました。

三合目あたりに、桜の木がかたまつて生えている平坦な場所がある。時季には大勢の花見客でにぎわう場所、物見平と呼ばれている。

戦国時代、駿河のあるじだった今川家なきあと北条と武田の争奪の地となった沼里。北条方がつくった当時の名残だが、今はそこからの眺望が知られた平和な一角だ。

新兵衛はあと一歩踏みだせば崖、というぎりぎりのところに立った。落ちる者がなく、一応は二本の綱が張られている。

横で源次が感嘆の声をあげた。こんなときにも思ったらしく、すぐにごまかしの咳払いをした。

確かに、いつ来てもいい景色だった。眼下には、狩場川をはさんで沼里の町が広がっている。

三層の天守が中天にかかろうとしている日を浴び、白く輝いている。下を流れる狩場川は伊豆の雪解けの影響も若干あるのか、ふだんより水量が多い。その流れを行きかう大小の船の群れ。

さつき渡ってきたばかりの青瀬橋が意外に遠くに見え、米粒のような人影がひっきりなしに往来している。町人たちも殿さまのかどわかしはすでに知っているだろうが、そこにはいつもと変わらぬ日常があった。

平成十五年角  
川春樹事務所





舞台のモデルとなった黒瀬橋・狩野川・香貫山

■読める鈴木英治の作品

数多くあるため、ここではその一部を紹介し  
ます。

文庫版

新兵衛捕物御用シリーズ

『水斬の剣』（平成十五年 角川春樹事務所）

『夕霧の剣』（平成十六年 角川春樹事務所）

『白閃の剣』（平成十七年 角川春樹事務所）

『暁の剣』（平成十八年 角川春樹事務所）

沼里藩留守居役忠勤控シリーズ

『信義の雪』（平成二十九年 KADOKAWA）

『果断の桜』（平成二十九年 KADOKAWA）

『流転の虹』（平成三十年 KADOKAWA）

『義元、遼たり』（令和四年 徳間書店）

など多数

シリーズ名称は徳間書店版（電子書籍版を含む）から



沼津ゆかりの歴史小説家

秋山香乃 昭和四十三年〜



秋山香乃氏所蔵

昭和四十三年、福岡県北九州市に生まれます。沼津市在住。夫は時代小説家の鈴木英治。平成十二年に秋山香乃とは別のペンネームでデビューした後、平成十四年に秋山香乃として作家デビューします。

主に、歴史小説を手掛け、平成二十七年からスタートした新聞連載小説『龍が哭く河井継之助』が、野村胡堂文学賞を受賞。『氏真、寂たり』（令和元年）など多数の著書があります。

令和四年三月から令和五年三月にかけて、鎌倉幕府を開いた源頼朝のみなものことを描いた

「頼朝陰の如く雷霆の如し」を『静岡新聞』に連載します。小説のほか、書評も手掛けています。

また、令和元年には、伝奇作家としてデビューし、同年に海外デビューを果たしました。沼津が登場する作品に『火裂の剣 助太刀人半次郎』（平成十七年）、『伊庭八郎幕末異聞 未熟者』（平成二十一年）、『伊庭八郎凍土に奔る』（平成二十三年）や『氏真、寂たり』（令和元年）などがあります。



## ■作品で描かれる沼津

### 伊庭八郎凍土に奔る（小説）

江戸時代から明治時代に移り変わる激動の時代に生きた片腕の剣士・伊庭八郎を描いた作品です。物語は沼津から始まります。

沼津に入ってから雨ばかり降っている。今日も朝から満街を濡らす。

田植えを控えた初夏の雨は、海からの風に煽られ、太い線を描いて斜めに地面へ突き刺さった。

泥が弾かれ、伊庭八郎の足元が土色にけぶる。こんな日に山に登る馬鹿はいない。

（俺くらいなものさ）

八郎は肩をすくめた。

山と言っても、八郎が登っているのは、標高が六百四十三尺（百九十三メートル）ほどしかない小さな香貫山だ。山頂まで登っても、せいぜい散歩程度の距離なのだ。

十二日前の五月五日から宿所にした靈山寺の裏手に、登山道が伸びている。

靈山寺は、地元の人に「れいぜんじ」の呼び方で親しまれる、この界限では大きな曹洞宗の寺である。山門前の火伏せの大銀杏が目印で、西光院と光明院という二つの塔頭を従えていた。

総勢二百七十五名もの遊撃隊を分宿させるのに、ちようどよい規模である。

別に八郎たちがこのこと決めたわけではない。沼津藩からの提案である。監視はきつくはないが、一応名目は「お預け」の身であった。

新政府軍総督府から軍監も差し向けられているが、行動を縛られたことはない。

「遊撃隊」は元々、長州征伐を見据え、慶応二（一八六六）年に幕臣によって組織された総勢六百名ほどの幕府銃撃隊の一つであった。

沼津に駐屯しているのは、本物の遊撃隊ではない。



作品で描かれる霊山寺（本郷町）

■読める秋山香乃の作品

数多くあるため、ここでは文庫版を中心にその一部を紹介します。

文庫版

- 『火の姫 茶々と信長』（平成二十三年 文芸社）
- 『火の姫 茶々と秀吉』（平成二十三年 文芸社）
- 『火の姫 茶々と家康』（平成二十三年 文芸社）



『龍が哭く 河井継之助』（令和二年 PHP 研究所）  
 『氏真、寂たり』（令和四年 徳間書店）

単行本

『柳生十兵衛神妙剣』（平成十五年 文芸社）

など多数

このほか、紹介した『伊庭八郎凍土に奔る』（単行本 平成二十三年 双葉社、文庫版 平成二十九年 徳間書店）は、紙書籍版は現在絶版ですが、沼津市立図書館などで読むことができ、電子書籍版は購入できます。



沼津に生まれ育った作家

曾根 圭介 昭和四十二年〜

昭和四十二年、沼津市に生まれます。昭和六十一年、沼津東高等学校を卒業し、早稲田大学商学部へ進学します。大学を中途退学後、一般企業への就職を経て、作品執筆を決意します。

主に推理小説やホラー小説を手がけ、平成十九年、『沈底魚』により江戸川乱歩賞を、短編小説「鼻」により日本ホラー小説大賞短編賞を受賞します。

平成二十一年、短編小説「熱帯夜」で日本推理作家協会賞短編部門を受賞します。

令和三年には、犯罪小説『藁にもすがる獣たち』（平成二十三年）が韓国で映画化されました。



沼津東高校（岡宮）

故郷・沼津を舞台とした作品に、『本ボシ』（『凶地反転』改題、平成二十一年）があります。香貫大橋と千本松原で起きた殺人事件を追う刑事、一杉研志を主人公としたミステリー小説です。狩野川、沼津警察署、沼津市民文化センター、駿東郡清水町、伊豆長岡など、市内外が描かれています。

そのほかにも『暗殺競売』（平成二十九年）、『腸詰小僧 曾根圭介短編集』（令和元年）などがあります。





■ 読める曾根圭介の作品

文庫版

『鼻』(平成十九年 KADOKAWA)  
 『沈底魚』(平成二十二年 講談社)

『本ボシ』で舞台として描かれた香貫大橋(上写真)と千本松原(下写真)

『熱帯夜』(平成二十二年 KADOKAWA)

『藁にもすがる獣たち』(平成二十五年 講談社)

『暗殺競売』(平成二十九年 KADOKAWA)

『腸詰小僧 曾根圭介短編集』(令和四年 光文社)

など多数



沼津市出身の芥川賞作家

宇佐見りん 平成十一年〜

平成十一年、沼津市に生まれます。小学生の頃から物語を作り始め、作家の村上龍や中上健次の作品に触発されて、高校生のときから本格的に創作に取り組みます。大学では国文学を専攻し、演劇と歌舞伎のサークルに所属して、脚本を担当した作品が舞台上で上演されました。

令和元年、大学在学中に『かか』により文芸賞を受賞し、作家デビューを果たします。翌年二十一歳のとき、同年により三島由紀夫賞を史上最年少で受賞します。

令和三年、生きづらさを抱える高校生を描いた第二作『推し、燃ゆ』（令和二年）に



沼津市立図書館（三枚橋町）

より芥川賞を受賞。純文学作品としては異例とされる累計八十万部を超えるベストセラーとなりました。また、同作はヨーロッパやアメリカ、アジアをはじめ多くの国や地域で翻訳出版されています。

令和四年五月十四日には沼津を訪れ、当時刊行されたばかりの第三作『くるまの娘』を沼津市立図書館に寄贈しました。また、小学生の頃から帰省時にしばしば訪れたというマルサン書店仲見世店（大手町）同年五月三十一日閉店）に立ち寄り、その閉店を惜しみました。



■読める宇佐見りんの作品

現在読むことのできる作品は三作品あり、文庫化されている作品もあります。

『かか』（令和元年 河出書房新社）

文庫版（令和四年 河出書房新社）

『推し、燃ゆ』（令和二年 河出書房新社）

文庫版（令和五年 河出書房新社）

『くるまの娘』（令和四年 河出書房新社）



マルサン書店のあった沼津仲見世商店街（大手町）

## ゆかりの施設

### ■沼津市芹沢光治良記念館（施設内容は19ページ）

場 所：沼津市我入道<sup>せりざわこうじろう</sup>蔓陀<sup>まんだがはら</sup>ヶ原517-1

開館時間：9時～16時30分（入館は16時まで）

休館日：毎週月曜 休日の翌日 年末年始（12月29日～1月3日）

観覧料：大人100円 小中学生50円

（市内の小中学生は無料）

電話・FAX：055-932-0255

メール：kojiro@city.numazu.lg.jp



### ■沼津市若山牧水記念館（施設内容は40ページ）

場 所：沼津市千本郷林<sup>わかやまぼくすい</sup>1907-11

開館時間：9時～16時30分

休館日：毎週月曜 年末年始（12月29日～1月3日）

観覧料：大人200円 小中学生100円

電話・FAX：055-962-0424

メール：bokusui@thn.ne.jp



### ■長泉町井上靖文学館（施設内容は27ページ）

場 所：駿東郡長泉町東野<sup>いのうえやすし</sup>515-149

開館時間：10時～17時（入館は16時30分まで）

休館日：毎週水曜 年末年始（12月28日～1月4日）

観覧料：大人200円 高校生以下無料

（長泉町在住・在勤者は無料）

電話：055-986-1771 FAX：055-980-5313



## ■ 沼津ゆかりの文学者（近・現代編）

沼津にゆかりの深い文学者は数多く、全てをここに記すことはできないため、明治時代から現代にかけて、沼津に生まれ育った人、あるいは沼津で過ごした人や市内に文学碑や歌碑がある人などを中心に、生まれた順に紹介します。

### 凡例

名前（職業）（生まれた年〜亡くなった年）

沼津との関係・沼津を題材にしている作品名

★…本誌で個別にとりあげている人物

角田 竹冷（俳人・政治家）（安政三〜大正八年）

現在の富士市に生まれる。本名・真平。少年時代は魚町の商家で奉公をした。明治五年に東京に出て働きながら法律を学び、弁護士となり政界にも進出。幼少の頃から俳諧を好み、明治二十八年、尾崎紅葉らと秋声会の創設に関わり、『毎日新聞』『読売新聞』の俳句選者も務めた。大正九年に門人たちによって千本浜公園内に沼津で最初の文学碑が建立された。

池谷 観海（詩人・教師）（文久三〜昭和十五年）

現在の藤枝市に生まれる。本名・盈進、通称・鑛太郎。明治三十五年四十歳のとき、旧制沼津中学校に招かれて漢学を教える一方で、徳富蘇峰らとも交流した。在職二十余年、昭和十五年に死去。同年、沼津中学校同窓会有志により千本浜公園内に詩碑が建立された。また、乗運寺で漢文の講座「斯道会」を開いていたことから、牧水の墓の隣に蘇峰筆による「観海先生留魂之碑」がある。『観海詩鈔』

榎 不言舎（歌人・医師）（明治元〜昭和十七年）

現在の沼津市に生まれる。本名・豊作。東京で学び明治二十五年に沼津へ帰郷し榎医院を開業。父・正覚の影響で詩歌に親しみ、新聞『日本』や『国民新聞』等に俳句や短歌を投稿。医業の傍ら明治三十六年に沼津短歌会を歌人仲間とともに設立した。同会で伊藤左千夫を沼津に招き、交流を深めた。市営斎場近くの共同墓地に墓がある。『沼津風』『不言舎集』

与謝野 鉄幹（歌人）（明治六〇昭和十年）

京都府出身。本名・寛。教職を経て、落合直文の門下となり短歌を詠む。妻・晶子とともに各地を旅し、昭和八年には三津や大瀬崎を訪れた。前年に大瀬崎のビヤクシン樹林が国の天然記念物に指定されたが、その景観に感動してへ船をすて異国の磯のこちして大樹の栢の陰を踏むかなの歌を詠む。大瀬崎にこの歌碑がある。「五松山荘の歌」「三津遊草」

与謝野 晶子（歌人・作家）（明治十一〇昭和十七年）

現在の大阪府出身。本名・志やう。二十歳の頃より短歌を投稿し始め、後に夫となる鉄幹の機関誌『明星』に短歌を発表する。代表作に歌集『みだれ髪』等がある。夫・鉄幹と各地を旅し、昭和八年には三津、大瀬崎を訪れ、鉄幹没後にも来遊した。「三津の五松山荘」「三津遊草」「白桜集」「伊豆遊記」

真山 青果（劇作家・作家）（明治十一〇昭和二十三年）

宮城県出身。本名・彬。『南小泉村』により注目され、大正二年より松竹に入社。戯曲を手が

けた。昭和二十年八月の終戦より沼津市志下に住み、昭和二十三年に心臓麻痺により死去。

前田 千寸（画家・随筆家・教師）（明治十三〇昭和三十五年）

高知県出身。大正元年、旧制沼津中学校に赴任。昭和三十一年の退職まで同校で教鞭をとる。沼津市二瀬川に住む。大正九年、創立二十周年に際しスクールカラーである深紫を選定した。大正十四年には矢形の校章をデザインした。古代色の研究を続け、その集大成を昭和三十一年『むらさきくさ』、昭和三十五年『日本色彩文化史』として出版。沼津中学校時代の教え子である芹沢光治良や井上靖などにも影響を与え、『人間の運命』（芹沢光治良）『黯い潮』『夏草冬濤』（井上靖）等の作品には前田をモデルにした人物が登場する。

原田 濱人（俳人・教師）（明治十七〇昭和四十七年）

現在の浜松市出身。本名・八郎。教職の傍ら、俳句に親しみ、高浜虚子に師事した。大正十一年に旧制沼津中学校に教頭（英語教師）として赴任した。また、県内の俳句活動を広めることに

尽力し、俳誌『すその』『みずうみ』等に関わった。昭和四十年に香貫山の中腹に句碑が建立された。

★若山 牧水(歌人)(明治十八〜昭和三年) ↓三十六ページ

岸田 國士(劇作家)(明治二十三〜昭和二十九年)

東京都出身。フランス文学や演劇を学ぶ。昭和十五年から十七年まで大政翼賛会文化部長を務め、太平洋戦争後の昭和二十二年に公職追放となる。戦後、半年間内浦村の三津に住んだ。

★芹沢 光治良(作家)(明治二十九〜平成五年) ↓十一ページ

勝田 香月(詩人・政治家)(明治三十二〜昭和四十一年)

沼津市出身。本名・穂策。大火の後、富士宮市に転居。二十三歳のとき「出船」を載せた詩集『心のほころび』を出版する。昭和四年、二十九歳で東京都中野町会議員に当選、その後政治家として社会民主運動に貢献した。昭和四十一年死去。東熊堂の大泉寺に眠る。昭和五十六年に沼津市の港口公園に、代表作「出船」の詩碑が建立された。

尾崎 一雄(作家)(明治三十二〜昭和五十八年)

三重県出身。昭和十二年短編集『暢気眼鏡』により芥川賞を受賞。小学一〜二年生のとき、母方の祖父の家である日枝神社に一時預けられ、沼津に住んだという。『あの日この日』

橋爪 健(詩人・評論家・作家)(明治三十三〜昭和三十九年)

長野県出身。旧制沼津中学校、第一高等学校を経て東京帝国大学文学文科中退。中学校在学中から芹沢光治良や市川彦太郎とともに同人誌をつくり文芸活動をおこなっていた。第一高等学校在学中に前田千寸より校歌の作詞を依頼され、大正九年、沼津中学校創立二十周年記念式典で発表された。「沼津東高等学校校歌」「沼津市立第一小学校校歌」「沼津市立第四中学校校歌」を作詞する。

★明石 海人(歌人・教師)(明治三十四〜昭和十四年) ↓四十一ページ

金井 新作(詩人)(明治三十七〜昭和五十三年)

沼津市出身。詩に関心を持ち、慶應義塾大学を卒業後、大正十四年『奔流』を創刊主宰し、沼



津の文芸運動を推進した。代表作に詩集『瀛』  
『題を忘れた絵』等がある。

**落合 京太郎**（歌人・判事・弁護士）（明治三十八〜平成三年）

伊東市出身。本名・鈴木忠一。旧制沼津中学校、旧制第一高等学校を経て東京帝国大学を卒業。昭和六年から東京地裁判事を務め、その後水戸地家裁所長、司法研修所長などを歴任し、退官後は弁護士となる。歌人として二十歳のとき「アララギ」に入会、以後六十余年アララギ選者や静岡アララギの指導などを務めた。死去後の平成四年『落合京太郎歌集』が刊行された。

**積 惟勝**（歌人・教育者）（明治三十九〜昭和五十八年）

熊本県出身。小学校教員を務めた後、昭和十三年東京市立沼津養護学園（我入道）着任。戦後は大諏訪の東京都片浜学寮（児童養護施設「松風荘」）園長となる。昭和五十二年、沼津に「積教育福祉研究所」開設。歌人としても知られ東海短歌会を主宰、沼津こども劇場代表委員を務めた。我入道公園内に歌碑がある。『疎開学園物語』

★**大岡 博**（歌人・教師）（明治四十〜昭和五十六年）↓四十〜ページ

★**井上 靖**（作家・詩人）（明治四十〜平成三年）↓二十〜ページ

**伊藤 祐輔**（歌人・教師）（明治四十〜昭和六十二年）

大分県出身。早稲田大学在学中より短歌を創作する。歌人の窪田空穂に師事し、昭和六年、短歌結社「槻の木」に入会する。沼津商業高等学校、静岡高等学校、沼津東高等学校、沼津工業高等学校等で教鞭をとる傍ら、歌人として「愛好短歌」を積惟勝とともに発足する。昭和二十九年、「山脈短歌会」を主宰し、後に歌誌『山脈』を創刊、多くの歌人を育てた。沼津に住み、県歌人協会設立にも尽力した。『石糞』『千本松原』『見蛇楽』『春潮』

★**太宰 治**（作家）（明治四十二〜昭和二十三年）↓五十〜ページ

**大岡 昇平**（作家）（明治四十二〜昭和六十三年）

東京都出身。戦争中にアメリカの捕虜となった体験を基にした『俘虜記』や、生存のぎりぎりの状態を描いた『野火』などを手がける一方で恋愛小説も手がけた。終戦後しばらく千本浜の知人宅に身を寄せ、昭和三十年、修善寺・伊豆長岡・沼津などを舞台にした「沼津」を執筆した。

町田 志津子（詩人・教師）（明治四十四～平成二年）

沼津市出身。本名・飯塚しづ。沼津高等女学校（現・沼津西高等学校）、実践女子専門学校国文科を卒業。卒業後は県東部、伊豆で国語教師に就く。昭和二十年、空襲により伊豆長岡に疎開、翌年に沼津市町方町に移る。昭和二十四年から沼津西高等学校に赴任し、詩研究クラブの顧問を務める。昭和二十五年、詩誌『時間』に同人として参加し、詩人として活動を始める。昭和四十三年、五十七歳まで沼津西高等学校に勤務。昭和四十四年、静岡県文化奨励賞受賞。「海のほとり」「母の海」

武田 泰淳（作家・僧侶）（明治四十五～昭和五十一年）

東京都出身。中学から高校にかけての五年間は、現在の沼津市内浦重寺で毎年夏を過ごした。戦中は中国へ出征し、戦後作家活動に専念。昭和二十四年の「海肌の匂い」は、戦後に重寺を再訪した際の体験を基に描いた作品である。『新・東海道五十三次』

★田中 英光（作家）（大正二～昭和二十四年） ↓五十四ページ

渡辺 白泉（俳人・教師）（大正二～昭和四十四年）

東京都出身。本名・威徳。戦後、岡山、三島、沼津で中学・高校の教師として勤めた。沼津市立沼津高等学校勤務のため、昭和二十七年から四十一年まで沼津に住んだ。戦争の本質を鋭くついた俳句を数多く詠んだ。昭和四十四年、通勤中に脳溢血の発作で倒れ翌日死去。没後、沼津高校のロッカーより句稿本が発見され、『白泉句集』（昭和五十年）『渡辺白泉全句集』（昭和五十九年）が刊行された。平成二十二年に、沼津高等学校に句碑が建立された。

清水 杏芽（俳人・医師）（大正二～平成十四年）

埼玉県出身。本名・久明。東京医専卒業。医学博士。戦争中は軍医として従軍、上海で軍医・俳人の神尾静光より指導を受け、帰国後、宇田零雨に入門。昭和二十二年、千本緑町に清水内科医院を開業。昭和二十五年「双葉俳句会」を主宰し、月刊誌『双葉』を創刊する。昭和五十五年、沼津市大諏訪の天満宮（吉祥院）に句碑が建立された。昭和六十二年には松尾芭蕉来沼三百年を記念して、日枝神社に芭蕉の真筆句碑を建立した。『沼津抄』『沼津歳時記』『続沼津歳時記』

★江崎 惇（作家）（大正四〇〜平成七年） ↓五十七ページ

池宮 彰一郎（作家・脚本家）（大正十二〜平成十九年）

東京都出身。本名・池上金男。沼津市に育ち、沼津商業学校を卒業。戦後、映画の脚本家となる。平成四年に『四十七人の刺客』で作家デビューし、主に歴史小説を執筆した。第十二期（平成十四〜十五年度）燦々ぬまづ大使就任。

玉城 徹（歌人・評論家）（大正十三〜平成二十二年）

宮城県出身。昭和六十三年、東京から沼津市大塚、後に下香貫に転居する。昭和四十七年、歌集『樛木』で読売新聞賞を受賞。昭和五十三年に歌誌『うた』を創刊し、主宰した。平成十三年『香貫』で短歌新聞社賞、現代短歌大賞を受賞。「窮巷通信」「沼津の歌・自註」「わが沼津観」

西村 滋（作家）（大正十四〜平成二十八年）

愛知県出身。昭和三十六年から平成五年までの三十二年間を沼津市で過ごした。昭和五十年に『雨にも負けて風にも負けて』で日本ノンフィクション賞受賞。昭和五十一年に代表作の自伝的小説『お菓子放浪記』を刊行した。ミュージカ

ル版『お菓子放浪記』は平成二十二年に初演、平成二十八年には沼津市でも公演された。その際、新聞の取材に対して、沼津は「作家生活が始まった場所」と述べている。

★川村 晃（作家）（昭和二〜平成八年） ↓五十九ページ

深瀬 サキ（劇作家）（昭和五年〜）

沼津市出身。本名・大岡かね子（旧姓・相澤）。夫は詩人の大岡信。沼津学園高等女学校（現・飛龍高等学校）を卒業。大岡とは、大岡の旧制中学校時代の友人を通じて知り合い、後に沼津で偶然出会ったことで交際が始まり結婚。劇作家として数多くの戯曲を手掛けている。

★大岡 信（詩人・評論家）（昭和六〜平成二十九年） ↓二十八ページ

海老名 香葉子（エッセイスト・作家・絵本作家）（昭和八年〜）

東京都出身。本名・嘉代子。昭和十九年六月、国民学校五年生の時に家族と別れ、一人で沼津の香貫山中腹にある海軍省の官舎に住む叔母の家に疎開。沼津空襲で機銃掃射に襲われる。昭和二十七年、初代林家三平と結婚。自身の戦争体験を基に、絵本やエッセイ等を数多く手掛ける。

第四期(平成六〇七年度)燦々ぬまづ大使に就任。  
『母と昭和とわらべ唄』『いつも笑顔で―あの戦争と母の言葉―』

★末吉 暁子(児童文学作家)(昭和十七〜平成二十八年)

神奈川県出身。三歳の時から両親の出身地である沼津市に居住。青山学院女子短期大学卒業後、講談社に入社。編集者を務めていた時に創作を始める。退社後の昭和五十年、『かいじゅうになった女の子』で作家デビューする。主に児童文学を手掛けた。

★佐藤 雅彦(作家・クリエイティブディレクター)(昭和二十九年)  
↓六十二ページ

★狩野 あざみ(作家)(昭和三十二年)

沼津市出身。本名・門倉喜代江。始皇帝暗殺を題材にした『博浪沙異聞』で歴史文学賞受賞。歴史小説を数多く手がける。第六期(平成八〇九年度)燦々ぬまづ大使就任。

★鈴木 英治(作家)(昭和三十五年) ↓六十五ページ

★曾根 圭介(作家)(昭和四十二年) ↓七十一ページ

★秋山 香乃(作家)(昭和四十三年) ↓六十八ページ

★上坂 あゆ美(歌人)(平成三年)

沼津市出身。十八歳まで沼津で過す。平成二十九年から短歌を作り始める。生まれ育った沼津での体験を基にした短歌やエッセイを執筆する。『老人ホームで死ぬほどモテたい』

★水沢 なお(詩人・作家)(平成七年)

長泉町出身。沼津の高校に学び、大学在学中から詩作に取り組む。最初の詩「沼津」が『現代詩手帖』投稿欄に掲載される。平成二十八年、『モーニング』で現代詩手帖賞を、令和二年、『美しいからだよ』で中原中也賞を受賞。詩のほか小説も手掛ける。『シー』『うみみたい』

★宇佐見 りん(作家)(平成十一年) ↓七十三ページ

■主な参考文献

- 『田中英光全集』第五卷、第十一卷 田中英光 昭和三十一年 芳賀書店
- 『現代日本文学大系七十七 太宰治・坂口安吾集』太宰治・坂口安吾 昭和四十四年 筑摩書房
- 『ふるさとの文学 静岡』高杉一郎・岡田英雄編 昭和四十九年 文京書房
- 『若山牧水全集 補巻 写真帖』若山喜志子・大悟法 利雄編 昭和五十七年 日本図書センター
- 『菩提樹』大岡博追悼号 通巻第五百二十号 加藤勝三編 昭和五十七年 菩提樹社
- 『新潮日本文学アルバム十九 太宰治』昭和五十八年 新潮社
- 『静岡県出版文化会創立四十周年 静岡教育出版社創立三十周年 記念出版 静岡県の学校』静岡県出版文化会編 昭和六十二年 静岡教育出版社
- 『伊豆の文学―その風土と作品―』勝呂弘 昭和六十二年 長倉書店
- 『旧制沼中(沼津東高)二十二期だより』井上靖追悼号 星野重雄編 平成三年 旧・沼津中学校二十二期会
- 『新潮日本文学アルバム四十八 井上靖』平成五年 新潮社
- 『沼津ゆかりの歌人歌集展』沼津市若山牧水記念館編 平成六年 沼津市若山牧水記念館
- 『ふるさと文学館 第二十六巻【静岡】』藤澤全編 平成六年 ぎょうせい
- 『新潮日本文学アルバム六十二 芹沢光治良』平成七年 新潮社
- 『静岡県と作家たち 近代の文学誌』静岡近代文学研究会編 平成八年 静岡新聞社
- 『生誕百年記念 芹沢光治良と沼津』芹沢記念会・鈴木吉維・鈴木春雄編 平成八年 静岡新聞社
- 『沼津の文芸―近代散策―』勝呂奏 平成十年 沼津の文化を語る会
- 『槇不言舎の研究』関口昌男 平成十三年 静岡新聞社
- 『沼津中学 沼津東高百年史』上下巻 静岡県立沼津東高等学校創立百周年記念事業実行委員会／沼津中学・沼津東高百年史編集委員会編 平成十三年 静岡県立沼津東高等学校・香陵同窓会
- 『沼津文学紀行』鈴木邦彦 平成十六年 沼津文学祭開催実行委員会
- 『井上靖と沼津』勝呂奏 平成十七年 沼津文学祭開催実行委員会
- 『芹沢光治良研究』鈴木吉維 平成十九年 おうふう
- 『評伝 芹沢光治良 同伴する作家』勝呂奏 平成二十年 翰林書房
- 『大岡信・全軌跡 年譜』大岡信ことば館編 平成二十五年 増進会出版社
- 『近代沼津人物列伝』沼津市明治史料館編 平成二十五年 沼津市明治史料館
- 『詩人・大岡信展図録』世田谷文学館学芸部学芸課編 平成二十七年 世田谷文学館
- 『幾世の底より 評伝・明石海人』荒波力 平成二十八年 白水社

## 協力

■本冊子の刊行に際し、次の方々より、資料提供等のご協力をいただきました。また、ここにお名前を記すことができなかった関係各位に厚く御礼申し上げます。(敬称略・五十音順)

## 個人

秋山香乃 石井喜彦 井上修一 大岡かね子

岡寿里 佐藤雅彦 勝呂 奏 鈴木英治

鈴木吉維 曾根圭介 野沢朝子

## 団体・企業

明石海人顕彰会 一般財団法人井上靖記念文化財団 一般財団法人芹沢光治良記念文化財団 大岡信研究会 株式会社岩波書店 株式会社KADOKAWA 株式会社角川春樹事務所 株式会社河出書房新社 株式会社紀伊國屋書店 株式会社講談社 株式会社小学館 株式会社新潮社 株式会社ス。ポーツニッポン出版社 株式会社徳間書店 株式会社双葉社 株式会社文藝春秋 株式会社勉誠社 株式会社ポプラ社 神奈川県立神奈川近代文学館 我入道壮寿会 我入道連合自治会 公益財団法人日本近代文学館 公益社団法人

人沼津牧水会 静岡県立沼津商業高等学校 同窓会「明石海人の会」 静岡県立沼津東高等学校 静岡県立沼津東高等学校香陵同窓会 芹沢光治良記念会 長泉町井上靖文学館 沼津市広報課 沼津市明治史料館 沼津市立図書館 沼津市戸田造船郷土資料博物館 沼津市若山牧水記念館 安田屋旅館 有限会社トピックス

◇掲載資料の著作権については極力調査を行いましたがお気づきの点がございましたらご連絡ください。

◇収録作品のなかには、今日の観点からみると差別的な表現ととられかねない箇所がありますが、時代性、芸術性を考慮し、原文のままとしました。

◇本書中の写真・記事等の無断転載を禁じます。

『読む×見る×わかる 沼津の文学』

発行日 令和六年三月三十一日

編集・発行 沼津市教育委員会事務局文化振興課

沼津市芹沢光治良記念館

〒四一〇—〇八二三

沼津市我入道蔓陀ヶ原五一七一—

〇五五—九三二—〇二五五

監 修 鈴木吉維

勝呂 奏

印 刷 文光堂印刷株式会社

